

悪人製造の五則

子供の魂は軟らかである。動きやすく変りやすく感じやすい。一步誤れば大変なものになる。人の子の親は不知不識しらずしらずの間にこの軟らかな魂の芽をつみとり、傷つけ、萎縮させ、芯しんをとめ、悪くする。どうしたら悪くなるのか悪人製造の方法を考える。

一。頭から「馬鹿ばか!」「阿呆あほう!」「ボンクラ」と叱ることである。たびたび聞かしていると、馬鹿になること、阿呆になること、ボンクラになること確実。もと、よくできていた子供がどうかしたことで一週間ほど算術ができない、いつも神のごとく尊敬する先生が「君は馬鹿だね、お前には算術の頭はないじゃないか」と叱る。子供は催眠術にかかったように、ほんとうにできなくなる。

私の母は私を打ちなぐって叱ったが「お前は馬鹿になる」と言ったことはない。昔の先生が作文の評に「文章の天才なり」と書いてくれた。私はうれしかった。だがその作文の点は八十点だった。いいところをひき出そうとする、親や師の苦心だ。

一。することなすこと一つ一つに干渉すること。そうすれば、優柔不断な無気力者か、自暴自棄の反抗心にみちた悪者かができる。畑の作物は虫がついていず、いらぬ枝がのびないかぎり、ほっておくこと。角をためて牛を殺すの愚をさけること。

一。善いことをしても賢いことをしてもほめぬこと。子供は極端な見栄坊である。親の一口の褒めことばは、天来の妙音、ほめられての感激は、他日百倍千倍になって返る。しかし石川五三門は他処よその鉄はさまをとって帰ってほめられ、聖者源信は十六歳にして宮中に経を講じ、帝よりご褒美を賜り有頂天うちようてんになった時、名利に墜落せるものとして母に叱られた。ほめると叱るは一体である。「可愛くば二つ叱って三つほめ、五つ教えてよき人にせよ。」

一。羞恥心はじめしころを破ること。孟子は「惻陰之心仁端也。羞惡之心義之端也。」と言っている。惻陰とはあわれみいたむころ、羞恥は悪をはじめるころ、この二つの心が仁義のもとだというのである。羞恥心は誰でももって生まれる。しかし悪を行った時、その全体を白状させ、さらに多数の前に発表し、前科者として冷遇されると、ついにはこの悪を恥じる心を失う。羞惡心の処女性じゆうりんを蹂躪じゆうりんすることほど恐しいことはない。悪にむかつて鉄面皮てつめんぴになった者には、若き日のどこかにその記録がある。他人ひとの過去の悪はかくしてやること。

一。冷たく裁いて愛せぬこと。悪人を作る根本原則である。人は本来悪を好むものではない。善を好みつつ悪に陥る。その本人ささえいかに如何ともすることのできない鋭い心はいかにして培われるか。冷たき環境で、その心霊の扉をとぎすことだ。社会の冷たさが刻々に闘争心を生みだす、家庭の冷たさが悪人を作る。真の人間生活は、冷

たき裁きによつて成立しないで、温かき愛が創造する。悪人正機の聖人の世界が、道義から見た人間文化の基調でなければならぬ。

親の心

一月十二日午前三時五十七分、広島県河内町では、棕梨川鉄橋において列車転覆の大惨事をおこした。河内町こぞつての献身的活動を聞いた時、まぶたが熱くなつた。下り列車を二百メートルの近くで合図に成功して止め得た駅員の天晴あっぱれのはたらき。わけて痛ましいのは一家五人遭難、東京桜田小学校首席訓導西山政一氏の一家の最期、故郷佐賀県に帰り、東京への帰途、妻いちこは即死、次男政憲は頭部を砕き手当て中死亡、長男憲男は重傷、長女はる子は軽傷、政一氏は妻の死は知っていたが二男の死は秘して知らされなかつたため、すでに死んでいることも知らずに、重傷の悩みとうわごとを言いつつ、死んだわが子の額ひたいに手をあてながら、その回復を祈っていた。・・・人の世の悲惨事。

小さい覚悟

くるしいことがある。
じつと忍べ、火傷をじつとおさえて忍ぶ時の気持で、
新しい道がきつと開いて来るから・・・
この小さい覚悟が、行詰つた私を何度開いてくれたことだろうか。

禍福

釈尊は説いて言われる。
迦葉かようよ。一人の容麗かたちうるわしい女があつて、着飾つて他の家を訪ねたが、その家の主人は問うた。

「汝なんじはだれであるか」

「私は功德天である。」

「何をするのか。」

「私はいたる処に宝を与えるのである。」

これを聞いて主人は喜び、その女を客間へ導き、香をたき花を撒まいてもてなした。しかるに間もなくして、また一人の女が門前に立つた。まことにいやしい形装なりで、肌は破れ、衣もまた垢あせづいている。主人は言う。

「汝はだれであるか。」

「私は黒闇天である。」

「何をするのか。」

「私はいたる所の家から、その宝をなくするものである。」

これを聞いた主人は刀をふりあげて、

「出て行け、行かねば殺す。」

と言つた。しかるに女は

「おお汝は愚かな人である。今汝の家に入ったのは私の姉である。私はいつも姉と離れずにいるのであるから、私を追い出せば一緒に姉をも追い出すことになるであろう。」

と言うので、主人は家にかけてこみ、このことを功德天に尋ねた。功德天は、

「いかにもその通りである。私を愛するならば、妹をも愛してくれ。」

と言うので、主人はついに二人を追い出した。二人の女は、つぎにある貧しい家に行った。ここでは喜んで、二人を内に招じたということである。

明るい共和村の皆様

皆様……共和支部の皆様

私は山口県十二ヶ所、十二日間の転戦を終えて、五月一日午後二時本部に帰りました。たくさんお手紙を一通り読んでペンをとりました。私の原稿の時間です。私はすぐ皆様を思いました。

雨の中を秋芳に進出した、若人一隊の総攻撃、そして、涙をのんでお別れしたその夜の自動車の音、私たちはこの前、熊毛、都濃^{つゆの}二郡を終えて、二十三日午後四時幾分、厚狭^{あさ}で美祢^{みね}線の人になった時、私たちは刀禰^{とね}哲夫法将軍夫妻のお出迎えを受けて、久米の正覚寺さんとで一行五人になりました。伊佐まで来ると、於幅の安養寺の奥様のお迎えで六人になりました。於福につくと長念寺には多数のお出迎えで、支部発会の大会のため入りましてから八日間を、美弥の天地で活躍しました。八日間われらと行動をとみにせられた刀弥法将軍とは五月一日今朝小郡駅でお別れしました。

共和四千五百人の皆様、われらの共和村は、全国を通じての明るい村の一つであります。

私が皆様にお会いしたのは昨年十一月でした。香川、東京、大阪、鳥取、それから山口県、十一月も末つ方、私は小学校のあのりつばな大講堂において、村教育会の主催で「大乘菩薩道より見たる教育勅語の真精神」と題して二日間立ちました。私は4はじめて、村長様に会い、校長先生に会い、そして村の四天王に会いました。初めて会った村の長老たちが、みな求道の人であり、念仏の方であることを拝見し、講堂における村民全体の訓練づけなどを拝見した時、「明るい村共和」を感じました。一日妙覚寺で婦人会の方に語り、最後の日に刀弥さんのお宅で二回お話をしました。

皆様、皆様の村ではすべて上に立つ方々が、自ら進んで求道なさいます。阿武義一先生も刀弥嶺雪翁も、中村翁も、かつては満鉄病院長たりし阿武金槌先生も、江原先生も局長さんも、校長先生も中本村長さんも、私たちの大会の時にはお顔が見えます。刀弥哲夫先生は在郷軍人分会長として、組合長として重責があるのにかかわらず、奮然として、腰にさげられたサーベルの代りに、六字の宝剣をとって立ちました。かくして本年二月八日「驚天動地」の刀弥氏のモットーのままに美弥八日間の滞在は、皆様をしてついこの大運動網に参加せしめたのであります。

皆様、支部が生まれた日の式場の一隅に悲哀か歓喜か、人知れずお泣きになっていた方を知っていますか。生まれ出る者の親、何かおこるためには、きつとその裏には不眠不休の大努力を払って下さる方があるのです。誰でしょう。それは刀弥氏の奥様、刀弥むつみ法師であります。ご主人の多忙を助けて、一人で、本部との交渉、団員の募集に走った方です。

皆様、共和に燃えた火は、さらに於幅に、そして別府につきましました。四月二十四日、二十六日両支部とも発会式を挙げました。於幅支部は、校長先生や、都通先生、そし

て婦人会の方々によつて生まれ出でたのでした。別府支部は、共和村の人、田辺実雄先生の献身的な努力、そうです、先生一人のみ胸に生まれた「金剛の信」と理想とは、ついに竹本前村長、万代唯輔氏らを立たせて支部が生まれたのです。ここにまた、その裏に活躍した女性がありました。言うまでもなく田辺先生の奥様、田辺つち子法姉です。私どもは一体同心となつて、ご主人と共に活動なさつた奥様の黙々の努力に涙せずにはいられませんでした。

皆様……特に若い皆様、「私ども一人ひとりがみな共和村を代表するのです。一人ひとりがわが明るき共和の誇りを傷つけないように行動いたしましょう。」あの妙覚寺での春季大会の終ります時、皆様の眼は輝いていました。誰にだつて、どこにだつて、傷のない、欠点のない者はありません。共和村だつていくらも悪いところを持つていてしょう。しかし、悪いだらけ、傷だらけの村が多い中に、われらの共和は誇つてもいい、いい村なのです。

特にわれらの共和は、精神文化のために一致団結します。懸命です。私たちはもつともつと進みましょう。そして天下にまれなよい村にしましょう。されば！ 共和村のこの誇りを傷つけるなかれ。そして挙村一致進達の一路を奮進せよ。

力だ！

あなたはその背負わされた苦しみに堪えられないと言うのか、無理もない。

だが、あなたはまだ若い。逃げず怖れず、その全体を背負つて立つて見よ。力だ！

信力だ！

われに七難八苦を与えたまえと祈つた人さえある。

働かなくても、苦しまなくてもすむお坊ちゃんに生まれたかつたのか。それとも人生の意義がほしいのか。

今まで私の言つたことを真に受けて立ち上がれ。十年二十年の後には金では買われないものが残る。

力だ！ 泣くな！

型

きわめて天真爛漫な一面を持つことはいいことである。しかし笑顔さえ見せてはならないような場合に、駄じゃれを言つたり、滑稽や与太を飛ばすのはいけないことである。禅門ではその修行の聖座に座禅した時、歯を見せてさえ叱責されるといふ。

形式が何になるかというものの考え方がある。しかし一切の形式を棄ててしまつたところに、美しい人間生活があり得ようか。型において型を超え、儀式において儀式を超え、形式を重んじて形式を超えたところに、美しい人間生活があるのではあるまいか。

さらに極言すれば、形は心の現われである。心が添っていないで形式だけ美しくしている偽善的な生活を嫌うのはいい。けれどもそれはけつして形式がなくてもいいということではない。われらは、とつてはならぬ形式で動く。形が崩れている時きつと墮落しているのだ。意業が外へと発展した時、口業や身業となる。身業とは動く形

式である。心の崩れた野卑な生活形式をとる。何を常に言っているか。何をしているか。われらは誤つたる赤裸々の尊重から、幾度も、とってはならぬ形式かたちにおいて動く。

われらはまずわれらの動いている形式において反省しなくてはならない。

殺人剣

どんな悪い人にも悪いところがある。どんな悪い人にでも生かしてかかれば善いところがある。その個性の全体を生かしきるのは、善悪を越えたる世界からの光であり、愛である。われらは愛のたらないことは言わないで、それ以前に善悪で裁いて人を殺す。幾度も人を殺す。裁きは殺人剣である。

人の弱点

責められ、叱られ、縛られた時には働き、許され、托せられ、信じられた時には怠ける。これ人情の弱点である。

三尺の童子すら托し得る人物

事業の一切をゆだね得る人物

村を国家をまかせ得る人物

人物はなきか。

人物はなきか。

肉身を大地に受けた。

肉身あるがゆえに食わねばならない。肉身あるがゆえに罪悪があり、煩悶がある。しかし大乘菩薩道を念仏の中に発見する時、肉身あるがゆえの道であり、仏であった。物や肉身はわれを殺す地獄ではなくて、真にわれを生かす浄土であった。私は私の肉体をいたわってやります。

お腹が悪い時には一口のご飯すら百回もかんでやります。あまり疲れたと言いますから、横になつて眠らせてやります。

壇上に立てば、私の心のままに、立ちつづけに三時間でも働いてくれます。

私は地上に肉身を受けました。それを喜ばずにはいられない。よしこの身がいかなる苦難の中を歩もうとも。

喜怒哀楽もこの肉身を受けたがゆえに味わわれます。法蔵の願心もこの肉身あればこそ、誕生するのであります。

四月八日は釈尊の肉身を受けられた尊い日、五月二十一日は親鸞聖人が肉身をお受け遊ばしたためたい日であるように、私は私が地上に肉身を受けさせていただいたことを尊ばないではいられない。

「何だ、あいつか。あの男が何になるものか。あの男のことならおれが知っている。だめな奴だよ。」

「あなたはその人を知っていますか。何年くらい前のことを知っていられますか。」
「十年前だったかなあ、あの男に一度会ったことがある。」

だが十年前のその人と今のその人とは同一ではない。古い過去をもつて今の人を推量することは悪いことだ。厳密に言うならば、昨日の彼と今日の彼とは一つではない。彼はその間にいかなる変化をとげているかも知れない。

大工の弟子も五年たてば素人しろうとから玄人くろうとになる。

卑怯者

卑怯者！ 何ゆえに右に行くように見せて左に行くか。何ゆえに善人顔をして自らを偽るか。暗いのも無理はない。愚痴が出るのも無理はない。なぜ強く汝は汝の足で、汝の道を歩まないのか。汝のような卑怯な善人、他律的な人形、それが葬られるところを地獄というのだ。

あきらかに見よ

「なぜ暗い顔をしているのです。」

「私は今日夫にそむいて出て来ましたから。」

「叱られたらと思つて心配なのですか。……………それならすぐお帰りなさい。」

「講演を聞かねば帰れません。」

「それなら聞いて帰りなさい。」

「でも帰った時がこわいのです。」

「幽霊！」

「え！ 私が……………？」

「死の存在！ 幽霊！」

「でも私がこうして道を聞かしてもらって、少しでも明るく、やさしい妻になりましたら、あの荒んだ夫がよくなるうと存じまして。」

「馬鹿！ 火の消えた火鉢！ 愚痴の幽霊！」

「間違っていますか……………」

「ペテン師！ 詐欺師……………幽霊！」

「私はどうすればいいのです。」

「自分が幽霊のくせに、夫を生かすの何があるか。荒んでいるのは夫じゃない。貴女だ！」

「でも夫の仕打ちがあまりです。昨夜も私は……………」

「正宗の名剣が真綿で打ってできるか！」

「え……………それでは……………」

「愛せられて甘え、叛かれて泣く、幽霊の浮かぶ瀬はない。」

「私は幽霊でした。しかしいつまでも幽霊であってはなりません。私は聞きます。そして夫よりも私が救われねばなりません。何だか新しい世界が開かれたようです。」

「あきらかに見なさい。あなたを碍げる何ものもありません。あなたの夫だって悪人ではないのです。あなたの道を決定してくれる善知識かも知れません。」

「私はもう泣いてはいません。幽霊であってはなりません。」

懺悔を語って懺悔せず。喜びを語って喜ばず。道を語って道を踏まず。悪人を語って悪人ならず。

自己を偽る者の灰色の流転、汝何がゆえに素裸に直接せざる。汝を迷わす狐、汝の内に巣くう汝、すなわち狐そのものなるを覚らずや。

無想録 四

私の周囲の者が、私の気に入らぬことをする。
私の心は怒る。

私の周囲の者が、私の真意を誤解する。
私の心は怒る。

立腹、寂寥、愚痴……あらゆる感情が頭を持ちあげる。そしてそれらが言う。
「私に勝たしてください。」

苦しい胸をじつと抱く。涙さえ流れる。ひとりで悶える。だが、私の魂の中から爆発する。

「怒ってはならない！」

魔軍一時にどこかに退散。天地もとのごとく晴朗。

私憤は人物を小さくし、事を破壊し、世界を狭くする。

公憤は人物をつくり、社会を改革し、万人に幸福をもたらす源泉となる。

「怒りは敵と思え」という。しかし何がどうなっても怒りもし得ないような人間が何になる。

不正義が通り、弱者が虐げられても、公憤も感じなければ、感激もないところに何の生活があり得るか。

煮ても焼いても食われない人物になれ。金でも食われず、地位でも食われず、悪罵にも好評にも火にも水にも動かない人物になれ。何かを怖れるものに何ができるか。

男！ 男だというのか。もつと線の大きい男になれ。それくらいのこと悲しみ、それくらいのこと驚き、それくらいのこと倒れるのか。

小さい感情、それもいい。繊細な注意力、それもいい。だが、その背後に山をも抜く太さがある。

汝が起つて不正と戦い、虚偽を滅ぼし、弱者のために血路を進むことは、やがて恵まれざる大衆の幸福を開拓するのだ。

君たちは、民衆の開放を叫ぶと言いつつ、なぜもつと自制しないのか。なぜ、その日常生活が常識を裏切るような変奇なものなのか。その髪を、その服装を、その言葉を、そして社会的礼儀を、なぜもつと通常人のごとくしないのか、そしてなぜもつと、だらしなさから出ないのか。君たちの運動自体を社会から隔離するじゃないか。

昔、高山樗牛は「吾人は須く現代を超越せざるべからず」と叫んで、明治の青年の心を動かした。それよりもまず「吾人は、われを超越せざるべからず」と叫ぶ。われを超越するとはわれを真に知ることである。われを真に生かすことである。「心頭を滅却すれば火もまた涼し」とは、真に「あつい！」と言うことだと慶沢和尚は言う。火

の中に入つて真にあついままに火を超え、寂しさ苦しさの中にあつて、それを超え、善悪の中にあつて善悪を超え、やがてわれ自らさえ超えるところに真にわれが生きる。

真の涼味は汗の中にある。活動の中にある。

真の安心は、大活動の中にある。

真の静けさは、動乱を動乱として動乱の中に処してゆく心の中にある。

宗教的な信も安心も、ただ生活の中にある。

汝を守るものは汝である。汝らの世界を守るものも汝らである。汝を単なる涙から救え。そして起て、汝が衷心の信に起ち上がる時、汝を責める虎だと思つたものが猫にかわる。汝の心に金剛の意志が生まれ、汝らの世界に団結が生まれた時、汝らの世界は守られる。

不合理な存在の城にたてこもる百千の男は、正しさの上に立脚する一女性よりも弱い。権力は最後の力ではあり得ない。

宗教の安心境は、現実ありのままの中に全我を托しきつて生死苦樂一如の世界に見出される。しかしこの全我投托の安心境をはき違えて、無気力なあきらめ主義や、盲目的屈従だと考えるならば大変な間違いである。

多くの祖師たちはその時代での正しさを守るために、眞実を顕わすために勇敢であつた。みな流罪をも牢獄をも迫害をも厭わぬ、獅子奮迅の意志の持主だつた。彼らはみな、時代の異端者だつたのだ。

「自分を祖師になぞらえるほど高慢であつてはならない」という独善、偽善の城に卑怯にもたてこもつてはならない。

正しさを顕わすことは、最上の破邪である。

破邪は時に悪罵におわる。あらゆる世界に顕正せよ。民衆は愚に見えて、これほど正しいものはない。顕正の旗を民衆の中に立てよ。

無想録 五

真理の窓

一人の高僧の前に真に頭を下げることは、より高き仏の前に頭を下げることである。仏をはなれて僧がないように、僧をはなれて仏はない。

師の前に頭を下げた学徒は、そのまま真理の前に頭を下げたことである。敬虔は真理の窓である。

内省

一度も頭を下げたことのない高慢な男が、時に「頭を下げよ」と人に法を説く。

聖人はその相をさえ自分に見た。内省なきところ、道あることなし。

救われざる人

自己欺瞞ほど怖ろしいことはない。自己欺瞞におち入りつつ、それを自覚しない時、救うべからざる人になる。

枯死

自己欺瞞者は、普遍的実在からの声を聞かない。実在はわれらの現実に顕現してその文化的価値を実現しようとする。欺瞞者は、真の文化創造の野から列外に出される。

自然外道

欺瞞はおそれねばならない。しかし欺瞞のないということをも、腹が立てばなぐりつけ、色情がおれば女を犯し、ほしくなれば無理にでも取る。こうした気ままを、積尊は正しいとは言わなかった。それはおそるべき自然外道である。

二つの世界

「緋の衣を着たって救われるのじゃない。」

とKが言ったために老人たちは「これは異安心だ」と逃げただけでなく、攻撃してまわりはじめた。しかし若い人たちは、「それだ、それでなくては駄目だ」と言って、真の如來にふれようとはじめた。仕方のない人生の二つの分野だ。古いものと、新しいものと、型に固定したものと、無限に真実なるものにのびてゆくとするものと。

和上さま

山陰のある団員の方が福岡の病院に行っていたら、広島からこれもまた入院していた某和上？が「あんたたちはあんな馬鹿に話を聞くから駄目だ。第一、教員だった男や、役僧だった男に、宗学がわかるか。」

と、ずいぶん学問を鼻にかけてのご攻撃だったそうだ。

私はこんな話を、これまで幾十回と聞いたことがあった。初めは嫌な人間らしい思おもおきていたが、今まではあまり心にもとめなかった。しかし今日はもう一度考えを見た。

私には学階がない。そして学歴もない。そしてたいして学もない。それが悲しいことであろうか。私はたとい幾百回御本典を縦横無尽に読みつくしても、やはり「宗学一つ知らない教員の古手」なのだ。肩書は時に大きな傷さえかくす。肩書のない者は恵まれない。だが、そのかわりに実力だけがものを言うのだ。少くとも私は、実力以上に買われることはない。そして、そのために誇るべき何ものもない。いったい、聖人の学の態度は、今の和上さまのそれと同一であったであろうか。和上様方が学階のためにご勉強なさる時、清いみ心のみでなさったであろうか。

『歎異鈔』には、「あやまて学問して、名聞利養のおもひに住する人、順次の往生いかがあらんずらん、といふ証文もさふらふぞかし。」とある。私は無学だ、だから学ばねばならない。そしてこの和上方の声を聞いて進ませてもらうのだ。学んで無智に徹するのはこそ真の学ではあるまいか。私はうれしいありがたい微笑を禁ずることができない。私は一生、信の火に学を受け取らしていただこう。

黙々の教訓

こんなことを思っているとき、昨年、神戸の高工に講演に行った時のことが思い出された。古宇田校長先生は日本の建築界のオーソリテイだと聞いた。五十幾才かに見えるりっぱな紳士である。その日はちょうど、学生と教授方と、書記の人々が聞きに出られたが、講演前、聞かれるままに私は私の経歴をすべて述べた。先生の顔には、人を軽蔑するような何ものもない。学生主事の方に、教職員全部が出て聞くように命ぜられ「本校の宗教教育の第一着に先生をお招きしたのです」との低いみ言葉、ちょうどその日は、若槻全権が帰朝せられた日であったが、先生は途中失礼してお出迎えするからとのことであつたのに、ちよつと途中立たれたがまた帰つて最後まで聞かれた。それも椅子をわざわざステージの前に出して「他の方を代わりに行かして、聞かして貰いました」とのご挨拶。私はその日六波羅蜜について述べた。あの低い低い求道的なご態度の前に若い私は頭が下がってひどい黙々のご教訓をいただいて帰った。

知者と愚者

春芳さんが扇子にペンでこんなことを書きつけている。

「智も囚われるれば、無知に等しい。

人格と金貨はメッキを許さず。

聖者は聞き、愚者は語る。

真の智者は自己の無智を知る智を有し、

愚者は知らざるところなしと信ずる。

独り笑わんよりは、万人と泣け。

軽薄に笑わんよりは、深刻に泣け。」

と書いている。まさか私のはらわたを見たわけでもあるまいが。

真理は勝つ

時代は迷う。何をなすべきか。何が正しいのか。すべての分野に、こうした声がみちわたっている。だがこの混沌たる中にも、勝つものは真理である。いつの時代でもただ真理だけが勝つ。

罪悪

「これだけ言ってもまだ、あなたの存在は罪悪そのものだということがわからないのですか。」

「そんなに罪の深いとは思いません。私は格別悪いことをしてはおりません。」

「では思いきつて言いましょう。あなたが三十歳ごろには何をしていました。」

「ハイそのころは、私は化粧品商行商をしまし、妻は村で小さい店をしていました。」

「その見すばらしかったあなたが、六十歳になった今はどれだけ身代しんだいを持っていますか。あの大きな堂々たる家に住んでいなさるあなたが……。」

「ハイちよつと申し上げかねますが……。」

「いいです。十五万か二十万か持っていないさる今、あなたの子どもたちは、女学校、中学校、そして孫までが、中等、高等の学校で勉強していなさる時、あなたの家の事業、すなわち工場でコツコツ働いている人間には、一日いくらやっています？」

「ハイ一日五十銭か六十銭です。」

「朝早くから夜まで労働させて五十銭、もちろん食事はあなたが持つのでしょね。」

「いいえ、弁当持ちで来てです。」

「長い間あなたの工場で働いた人たちの家をちよつとのぞいてください。あなたの一家が絹ぐるみでいる時、その人たちはどんな哀れな生活をしているかを。あなたの身代のすべては一代三十年にできましたか。それはいったい何のですか。」

「……………」

「多くの人たちの汗脂をあなたが盗んだのです。」

「でも……………私はずいぶん働きました。そして知恵を使いました。」

「そうでしょう。過去の人たちはあなたのような人間を賢いとほめました。しかしあなたのすべてを明るみに出してごらん下さい。あなたは月一割の高利で金を貸したことはありませんか。差し押さえを何回しました？」

「……………」

「罪悪の結晶が今のあなたの身代なのです。慈善のために殊勝らしく出す金も、麗々しく名をあげてしなさる寄付も、罪悪それ自体です。曾無一善、唯知作悪」(かつて一善無し、ただ悪を作ることを知る)とはあなたのことです。日中大きな顔して歩けますか。あなたはこの世間ながらの餓鬼です。あなたの道は滅びの道です。あな

たのような良心の腐った人間には、天道はこつびどい報いをもたらします。魂が腐っている以上、何を言ってもわかりようはありません。お別れします。」

宿命感を尊ぶ

人生の重要な問題に直面した時、あるいは血のにじむような努力を要する問題にぶちあたった時、岩壁のような宿命を感じない人は、本格的な生活者ではない。どうにかなるさ、と言つてのける人を私は浅薄だと言う。しかしいつまでもこの宿命に泣く人は、愚かな人である。この宿命的苦悩に対する戦いからのみ、本質的な無碍の行が生まれる。

自由に、相手を傷つけることなく人を愛していると思う人、自分の芸術や思想が、美しい最高峰に立っていると考えている人に、愛の問題で泣いた聖人や、キャンパスの前で画筆をなげた画聖や、たたきつけるピアノの上を指から出る赤い血と涙をもつて洗つたピアニストの心中はわからない。われらは常に、そこに絶望の宿命を感じる。だが、第三の広野はその隣室に待っている。汝を導くこの光明にみちた世界への扉は、ただ汝にのみささやかれる。

議論するのはいい。夜を徹して論理の検討をするのもいい。だが、敬虔さを失つてはならない。思いを千々に練り、あらゆる小我の独断を蹴飛ばして、生命の真实性をつかもうとする禅門の人たちが「釈迦何人ぞ、われ何人ぞ！」と人間本来の尊厳を主張しつつも、一碗の水、一片の菜葉にも合掌する奥ゆかしい心情に頭が下らないではおれない。

合掌の心は尊き世界の扉を開く心である。
敬虔なる心情と態度を失つて、真理を云々する人々の世界は淋しい。

人なるがゆえに

人を赦すことが尊いとせられるのは、底なき瞋憎の心を持つのが人間だからである。瞋憎の心を持たない者は、石か神かである。心の全体をあげて悩みぬいた末、やがてそれを超えたところに生れるのが広い愛でもあり、抱く心でもある。

努力

努力せずして得たる宝は失いやすく、生命をかけて求め得たものは失い難い。

努力によりて獲得せられたる真理は宝玉と輝き、努力なき人の手に弄ばれる真理は塵芥と化す。

努力はいつの場合にも報いられる。

福山で映画「街のルンペン」を見る。ルンペン、ジンタが、友人が縊死したのを見て泣きながら、「おい野郎、だれの許しを受けて、死ぬなんて贅沢な真似をしやがるんだ。死んで極楽へ行った方がいくらかは俺だって知っている。だが、しなければならぬことがあるからこそ生きているんだ。野良犬だって野垂死するまじや生きているじゃないか。」

家もなく、食もなく、仕事もなく、食ったり食わなんだりして、青天井の下、草むら家をとするこの苦闘の中にも、人生の意義に生きようとするジンタの心、人間だ！人間だ！最後の一呼吸まで、ほんとうの人間として生きぬこうとする、その血のたぎりをおいて、どこにほんとうの人生があるか。正しく強い、そして太いこの歩みのなくなった者は、そして社会は釣瓶落しに没落する。

頼山陽

十月、広島では頼山陽の百年祭が行われた。そして天下の新聞は山陽先生について書いた。

山陽は体が弱かった。天保三年六月、彦根に遊んで帰った翌月、十二日肺結核が進んで咯血した。それから後幾度も咯血がつづいて体がめっきり弱ってゆく。死期の近づいたことがわかった。山陽先生最後の大事業であった「日本政記」がまだ完成されていない。山陽先生は急がねばならなかった。七月、八月、八月の八日ごろから自らは、門弟藤蔭を病床に呼び、口述して筆記せしめ、少しいい日には、起き上つて自ら校正した。涙ぐましい努力がつづいて、ついに『日本政記』はできあがった。しかし最後の念願の成就した日、天保三年九月二十三日は先生が地上から去らなければならぬ日だった。

山陽先生は酒を飲んだ。その若い日には父上の怒りさえ買った。だが、三十五才の時、十八才の梨影夫人と結婚された。窮迫の中にも夫をたすけた聡明な夫人が裏にあつたことを忘れてはならない。

山陽先生は先生自らが言うように努力精進の人であった。天才は必ず努力する。死の日まで『日本政記』の筆を棄てない。かくして不朽の山陽は生まれたのである。

ふしだらなように見える生活、あまりに人間味のある一生、だがその中に、ビューと一貫した意志と努力の流れ、それがその人の一生の価値を決定するのだ。

蘇峰先生の説にもあつたと思う。歴史家としてならば山陽以上の人はある。その漢文はあまりに倭臭味がありすぎる。いったい何が山陽なのか。はつきりとした時の流れの認識である。日本自体をつかんだことだ。そして燃えるような情熱と不動の意志である。一人の山陽が斃れるころ、幾多の山陽が生まれはじめていた。そして明治維新の大業は成就されていった。

何とかいう俳優は、雁次郎その他一流俳優の声色を真似したそうだ。そのことばや声もそっくり真似ることはできる。しかし真似はついに真似であつて、永久にその人

の本質を生かしきることはできない。思想の真似、流行の真似、型の真似、体裁の真似、軽薄なる才子のあまりに多い世の中ではある。

気づかぬこと

風呂に入る時、百人は百人、洗ふべき所を洗う。だが、足の裏を洗う人がほとんどない。足の裏は、足袋でも用いない時はあまりに不潔である。街の銭湯で見ていると、一人も足の裏を洗って湯に入る人がない。

人間よ、仲よくせよ。

人生は永遠に闘争である。内へ外へ正しからざるものへの強い闘争である。

真の闘争は私憤からは生まれぬ。真の人格的自覚による団結の力のみがもの言う。汝の持つ悪感情を、愚痴を清算しされ。

情に流される時、正しい智慧が曇る。正しい智慧が曇る時、正しい強い歩みがなくなる。

無想録 八

鼎の軽重かなえ

三日にして愚者と見られ、一ヶ月にして平凡と評せられ、一年にして信ぜられ、十年にして重んぜらる。

三日にして喝采され、一ヶ月にして飽かれ、一年にして軽蔑され、十年にして忘れられる。

三日にして喝采されるは易し、一ヶ月にして飽かれざるはなお易し、一年にして信ぜられ、十年にしていよいよ重んぜられるに至って難中の難か。

世の軽薄才子、三日にして勝ちを得んとし、一ヶ月にして大成せんとし、一年にして重んぜられんとす。愚かなるかな。

努力

ただコツコツと黙々の努力をつづける。

働いても働いても誰も認めない。もつとやれ。

認められるどころか、誤解され非難される。しかも一貫の努力をつづける。

かかる一貫の努力なきものに、おおよそ大器があり得るか。

努力は実力を生む。実力なき世渡上手の偽宣伝デマゴーグは、裏面を知られるとともに、汝を塵芥ちりあかたに等しゆうす。

汝、汝の親に尊ばれたりや、汝の師匠に尊ばれたりや。汝、汝の兄弟に信頼されたりや、汝、汝の妻に尊敬されたりや、汝、汝の最も近きものに尊ばれたりや。

「他人汝を軽く扱う」と言うのか。

絶対に汝以外に汝を軽んずるものなし。

大乘腹

一国の大宰相の腰グラついて、国家グラつく。客観的認識足らざるがゆえに、断行なし。断行なきがゆえに信頼なし。信頼なきがゆえに自信なし。自信なきがゆえに、腰グラつく。道元禅師の「莫妄想」の一喝、七百年昔の時宗ならずとも、必要なること今日もまたしかり。一切を懐いて動ぜざる大乘腹、
時いよいよ動乱、この腹なくして活発に地の自由境ありや。

五十年一章の詩

詩を書くは易し。

されど、血と肉と、生活をもつて一生一詩を成就するは難い。

自分の道を歩まぬもの

人が泣いている時、いつしよに泣かずにはおれないのは人情だ。

人が怒っている時、怒らないではおられないのは人情だ。

だが、涙にほだされたり、怒りに引込まれたりして、自分の生きてゆく道を失うことは、自ら死の道を求めることだ。感傷主義者に生きる道なし。

だが、怒るべき時に「カツ！」と怒り得ない人は、さらりと忘れ得ないものだ。長い愚痴にとらわれるのは「カツ！」と怒るよりも悪い。

笑う時、笑い得ず、泣く時、泣き得ず、言うべき時、言い得ず、行うべき時、行い得ない者は、愚痴の奴隷となる。自分の道を歩まぬ者の必然の相である。

磁石

青いものは青く光れ、赤いものは赤く光れ。青く出たり、赤く見せたり、白く化けたり、お前がぐらつけば周囲がぐらつく。強力な磁石が一個あれば、周囲の軟鉄はことごとく磁石になる。汝の腹が決定すれば、汝の周囲が決定する。

安価な平和主義のために、自分を周囲の色に合わす人間は、初め少しの間はたいへん好かれるが、近い内に周囲から敵を受け、やがて軽蔑され、嫌がられる。磁石には南北に一貫の力がある。

人生の機微

男が逃げると女がついてゆき、女が逃げると男がついてゆく。怒る夫の妻は従順で、甘い男の妻はかえって嬌慢不遜であり、放縦である。人生の機微ここにひそむか。セキスピアの「ジャジャ馬ならし」はここをつかんだものである。

長たるの器

日活映画池田富保の「英傑秀吉」を観る。

信長の前で、戦場における、長槍、短槍について便不便の議論があつた。槍術指南は短槍を主張し、秀吉は長槍を主張した。そこで信長は二人に貨すに、足軽三十人と三日の時日をもつてした。指南番は猛烈なる荒稽古をつけた。個人と個人との槍術を。しかし彼は、足軽どもを「馬鹿」と見た。そして口きたなく罵り叱り、打ちたたき蹴るので三日間には三十人ほとんど負傷者となり、ことごとくにおびえおそれる弱者の集団と化した。秀吉は、足軽三十人を人格として重んじ、礼を厚くし、個人の腕よりも、団体訓練を重んじた。彼は褒めた。彼の意志を徹底させた。特に夜は酒肴をもつてねぎらい、妻のお八重は兵の汗まで拭いてやった。三日後の双方の仕合の勝敗はすでに決している。

松下嘉兵衛の足軽から、やがて信長に仕え、ついに羽柴筑前守秀吉と任官出世した時、今川の没落とともに今は乞食よりもむごたらしく零落した嘉兵衛のアバラ屋を、筑前守の威儀を正して訪れた長い行列、華麗なるお籠、その中から嘉兵衛の前にあらわれたる秀吉は、昔の仲間姿であつた。その昔下郎の時、嘉兵衛が秀吉を教訓するたために打ちすえた。その時使つた、草履一足、つづれを身に、病にやつれた老人の前にならべ、「旦那様！藤吉郎にござりまする」昔を忘れぬ秀吉、下郎姿の筑前守、美しいカゴに嘉兵衛を乗せ、自らその側に従う秀吉の姿、涙せぬものがあるうか。

人を尊敬せざる者、尊敬されず。目下を遇するにこの慈愛をもつてし、師長に対するにこの報恩と礼をもつてす。これ長たる徳器か。

他人を善悪によつて裁く者は、自分をも善悪によつて苦しめ裁く。悪を善によつて滅ぼそうとする者は、仏の隣室にはいるが、しかし暗の世界、抽象分裂の死んだ生活であることに間違いはない。具体全一、一心金剛の生活、生命さながらに燃えてゆく自然法爾の天地に善悪はない。

清算

常に自己を清算しないものは弱い。清算するとは「あきらかにみる」ことである。「諦^{あきらめ}」とは、法とわれとをはつきりとみることである。あきらかにみないから弱い。弱いから恐れる。一切を清算した底から新しい力強い新生がはじまる。

年末年始は自己清算にとつてのよい時である。

終始一貫

終始一貫ということばは美しい。

しかし人間はただことばを持つていただけではないか。

「初めは手でしたことを後には足でする。」

これが常人の世界のありさまである。

後に足でするぐらいならば、初めから足ですればいいはずだ。だが、そうはいかないのが人間である。

初めは泣いて誓った者も、最後のどたん場になつて、利益や損害になると態度を変えらる。

五年、六年、十年と同一の姿で一貫することは困難である。

時たま、至誠一貫の人があれば、この人はきつと何ものか持った人である。

人間は強い

私のある日の日誌には次のように書いてある。

「人間は弱いものだ。」そうした結論を握った人の心――

そうだ、人は確かに弱い。だが、人間は弱いか。人間が弱ければ何が強いのだ。いったい何が強いのか。人間が強くなって何が強いのだ。神というも仏というも、人間の生活をおいてほかに、そのどこに力を示すのだ。天を地に、地を天に、海をさき、大地をくぐるも人間ではないか。「人間は強い」その結論を得るために俺は生きているのだ。「人間は弱い」その結論は、努力精進なくとも、人間群落の中に見出される。「人間は強い」それを人の上に成就し、われの上に成就する。そこにのみ生活の意義はある。認識が問題になるのも、宗教、哲学が生まれるのも、真の強者のためのゆえではなかったか。「人間は弱い」その結論をひきやぶれ！ 汝の生活に真の強さを立証せよ。奇跡を生むものは人間である。

正義漢

原敬氏毒刃に斃^{たお}され、浜口雄幸氏やられ、今また前蔵相井上準之助氏撃たれる。暗殺の国日本！ 頭の簡単な正義漢、この愚拳をくり返す。もつと賢くなれ日本人、政治発達の上に憂慮すべき現象、この蛮風やまずして正しき明るき政治ありや、一人の簡単な正義意識から代表的人物を殺す人間の国に。

このまま

真宗の同行に限つて「このまままいられる」とくり返す。努力精進を通さざる、このままに何の意義があるか。長い間、この間違われたる教育を受けし宗教人は悲惨である。自力を否定しつくしたる仏凡一体の境、生死涅槃一如の境、不断煩惱得涅槃の妙境は、そのまますら超えたるそのままである。至り得たる人少し。

伝統と理想

民族の伝統を尊び、因襲を去って、人間開放の理想を伝統の上に生かさんとする運動、世界的におこる。因襲滅ぼすべし。伝統尊ぶべし。しかして大理想を生かすべし。文化を消化すべし。とつてつけたような翻訳時代去る。日本における過去の新しい運動は常に天皇への復帰によつてなされた。昭和の日本よ、天皇にかえれ！「官武一途庶民ニ至ルマデ各ソノ志ヲトゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。」ちまた巷に飢餓の声あふれる。為政者よ、いな民族よ、天皇の心を徹底せしめよ。大御心おおみこころより遠ざかる日、国危し。

愛欲か名利か

愛欲に冷淡にして名利に強き人、仏道を得たるがごとし。独善にとじこもつて、善人顔なるもの釈尊の信境より遠し。愛欲、名利、物欲を超えて、久遠の仏心に直入する者に至つてはすくなし。聖人の本願海、大乘菩薩道の真髓に至つては極難信なるかな。愛欲に居り、名利、物欲を満たしつつ、しかもそれを超ゆ。超えるとは、消滅にあらず。

道草

強き者は英雄主義となり、弱きものは感傷の涙の谷に沈没する。
如来の願心に生きるとは、英雄主義的興奮にもあらず、涙の谷の甘露にもあらず。

あきらめ

つらいことに出合った時、自分よりも不幸の人を見てあきらめるといふ人がある。道徳的にはいいことかも知れぬ。
しかし仏教の真髓を生きるのとは、だいぶんの差がある。

破和合僧

身の行いのふしだらな説教師が、高座の上から、「坊主の悪口を言う者は、五逆の一つ『和合僧を破る』地獄の重罪というものじゃ」と啖たんか呵をきつた。さめた聴衆たちは、厚かましいこの僧侶を笑つた。

師教

實際寺の慶沢和尚から聞く。道元禪師のみ教えにいわく

「無上菩提を演説する師に会わんには、

種姓を感ずることなかれ

容顔を見ることなかれ

非を嫌ふことなかれ

行ひを考ふることなかれ

ただ、般若を尊重するが故に、日々三時に礼拝し、恭敬して、更に患悩の心を生ぜしむることなかれ。」と。

説く者の世界、聞く者の心得、そのどちらにも道がある。道元の教訓は、非道な教役者の自己弁護、または、自己の地位利用のための材料ではない。師教に忠実なるべき仏徒の態度である。

梅

冬例年よりも温し。

すでに山奥に梅かおる。総選挙、支那事変をよそに、谷間に梅かおる。人は時にこの梅と語るを要す。

無想録 十 小人

竹の筒から天を見る。丸い穴にすぎない。小人ども、竹の筒より人を見る。針ほどのことが、棒はおろか、宇宙大に見える。

「われは完全なり」との意識は小人につきもの、強ければ、我慢の悪臭鼻もちもならず、人を虐げ、人を苦しめ、人をやりこめて得々然たり、大乘菩薩道を遠ざかることはなほだしい。弱ければ、涙の谷に墜落、センチャンの末路は流転しかない。

明治薬学専門学校長、恩田剛堂先生は「靈魂談」においていわく

「心に抵抗力の少ない人は、いかに強烈な悪言罵詈(ばり)を受けても、けっして忿怒することがない。これに反して剛情剛腹な性質の人はわずかに軽微な悪言を聞かされても、たちまち激怒を示す。同じ針金でも細くすれば細くなるほどそれだけ電気に対する抵抗が多くなり、これに反して太くすればするほど電気に対する抵抗が少なくなるのであるから、細い針金に電気を流せば針金は赤くやけるが、太い針金に電気を通したのではその針金はなかなか赤くならん。これによって考えても、怒り易い人の心の狭いことが察知せられる。」と。

怒る者、自分の筋の細いことに気づかず、たたいたものを悪く言う。しかし細い針金は、気にいらぬ棒で打ちのめすよりほかに太らす方法はない。

我慢強き者は小人である。我慢によって千人を傷つけ泣かすめつつあることには気づかず、そのくせ、称讚よりほかのことばは一言も受けまいとする。

感謝と、懺悔のないのが我慢の特徴である。そのくせ人には、感謝を強い、懺悔をおしつける。

英雄は尊ばねばならない。しかし英雄主義者は悪まれる。

温かき人格者は世の光である。しかし感傷主義者は孤立する。

英雄主義者と感傷主義者が集まると、悲劇が絶えない。

彼はだれの前にも、どんな真理の前にも、頭を下げない。

したがって彼の前ではだれも頭を下げない。

友達が頹廢的になってなまけると、自分もいつしよになまける。今日一日をただれただらしなきで費す。

だが、この人たちの群の中には、将来の一世、一国、一社会を背負って立つ人たちはいない。

熱誠一貫！ 堅忍不拔の意志！ 小人に欠けたものがこれである。

素人政治家、伍長勤務上等兵の独逸国粹社会党主ヒットラーの上に世界の眼が集まる。独逸民族を背負って立った彼の上に。

小人は形態を真似る。景気のいい時ほどやっとな保たれる。人形ならば風雨にくだけ、人造人間には創造がない。

小人は小人に褒められることをのみ求め、偉人聖者は、自己の衷心の声に忠実である。

小人には後悔が多い。

後悔を懺悔にまで転回せよ。

「以て三尺の孤(みなしご)を托すべし。」とは、偉人の信頼さるべきを言うのである。三尺の孤どころか、一会社の会計すらまかされない。

信じてまかせるに足る時、人はやっとな一人前である。

小人には低級な策略がつきものである。明治維新の初め、大江戸を兵火より救った大西郷と勝海舟の腹、あんな大きなことは小さいはからいからは生まれない。

偉人は刻苦勉励して一つの結論を成就し、小人はやすやすとその結論を記憶する。前者は一生の心血の結晶であり、後者は単なる知識である。25

私憤のためには時に七人の人を殺した者がある。しかし万人のために、大道のために戦う大慈悲の人は少ない。

小人はただ平和を求め、偉人は七難八苦を恐れず。一切を受け取って彼を生かす食物とするからである。

われに都合がいい人が大人物であり、自分に都合の悪い人物が小人物に見える。明君は賢臣の苦言に耳をかたむけ、聖者はかげ口にすらわが身をふりかえる。

小人の人物評価、耳をかす一文の価なし。

内省沈々、ただわが身の小人なるを知る。ただ凡夫なるを知る。

無想録十一 腹

私は常に腹が悪いので、たまさかに腹のいい時のご恩がわかる。

肉体の腹は医師にかかれば、徹底的に治りもするが、人間の腹の悪い——腹の黒い——のは何で治せばいいか。

胃弱？の人、自動車にて嘔吐する。側で見ても気の毒である。

車中の嘔吐は、車になれることよって治りもする。

しかし聞く真理も食らった名言も記憶した尊き教えも、一向受け付けぬ邪見の胃病、神経病は何によつて治すべきか。

不屈の人——「大いに屈する人を怖れよ。ピンと撥ね返す力が強いからだ。いかに剛毅に見えても、その言動に余裕と味のない人は、ともに大事を成すに足りない。悪罵を平然と受け流す人が一番底気味悪いものだ。」——伊藤博文——
雑誌一冊五十銭、これだけ買って安いもの。

言動に余裕と味のない人、腹の小さい人のことである。
悪罵を平然と受け流す人、その底気味の悪い人、大事を成就する腹の太い人である。

牛車に向かう蠅螂……カマキリのためには、天地一番の大事でも、牛にとつては問題ではない。笑うにたえたるはカマキリの斧、しかしてカマキリの斧を、天地一番の大事とするに至つては、相手もまたカマキリの類を出でない。

腹の小さき男、それを求める女なし。

蚤に食われたら死にそうな小さい魂の男、女ならずとも求めぬが当然である。彼は暗黒界の大王である。

怒るもよし。さらりと流す人は気持がよい。

三年越しの鬱憤、何もできないのがあたりまえだ。それを背負っているだけで一荷ある。

悪いとわかればきつぱりとあやまる。男の中の男一匹だ。

三等汽車の中にやつと席を求めてよむ——

「婦人公論」が二ヶ月にわたつての光明団大攻撃、ずいぶん全国に徹底した。

あれならと思う△△高等女学校長の僧侶、何県の大家△△氏、自称学者の○○氏と、何人もの高僧方が、光明団の念入りの攻撃、琵琶歌「北満の嵐」の名文句ではないが、「前門は鉄火の垣、後門は魔風火をよび……」の勇壮ぶりだ。

だが、これほどのご丁寧な、大がかりのお取り上げを受けるほどの私だろうかと、ちよつと面食らってしまった。まだまだとても大勉強せねば、みなさまのご期待には添われない。宗教を撲滅したいお方と、あるいは、あの杉山さんが書いた何とか寺のご住職のようなお方とのお気には入るまいが、いよいよ大乘菩薩道を真向から……奮戦さして頂きましょう。

景気のいい時に、毎晩芸者買いに出かけた大尽が、この不景気に、しばしば日本刀に手をかける。腹の太い男は、家庭では威張らぬものなり。

大胆細行……この人ならば、草の庵を三度たたいても、出馬を願うべきもの、諸葛孔明でなくても英雄君子聖者、偉人みなしかりである。

大胆にして細行なければ、千丈の堤を時に蟻の穴より壊し、細行のみにして大胆なければ、大事をとるに足らず。

相模太郎の肝、堵のごとく決して十万の元兵全滅し、腰ぬけ武士、瓢箪を斬つて、幽霊を平げたるごとく吹聴に及ぶ。

聖者の腹はこれを測ることを許されぬ。

罪の裁断(他人へ)と、善の賞讃(自己への)とを、所有しなかつたのが彼である。27

悪逆にして腹の小さき者は、罪の裁断をもつて人に復讐し、聖者は大愛をもつて復讐する。

凡人は仇を感じれば、肉体の上に復讐の刃をむけ、聖者は大愛によつて懺悔救済を与える。

凡人は、凡人の称讃を自ら求め、聖者は凡人の称讃よりも神の声を尊重する。

悪逆の刃を揮うは肝小さきがゆえである。

悪逆の刃をおそれ逃げるも腹小さきがためである。

人を許す太き腹は、己を知ることによつてできはじめ、はつきりとした理想を持つことによつて忍の徳に培われ、百戦練磨、きたえられることによつて大成する。

不動、山のごとき人格に至つては、金剛信の発露のみ。

腹太き水流れの土左衛門、たたいても反応なし。

生きているがゆえに痛くもあれば、かゆくもある。偉人聖者もそれである。

要はただ、たたかれて何と鳴つたかが問題である。

己を知らざる者は、時に海山の恩恵をも、相手の一の過失によつて葬ってしまう。親において、長者において、師において。

士は己を知る者のために死す。

腹をたたけ、腹はさまざま痛棒によつてたたかれて太る。
何でも食え。何でも食える時、腹は健全にして太った時である。

無想録 十二 ユーモア

人間は泣く、人間は怒る。だが人間は笑う生物である。

泣くことを知り、怒ることを知って、笑うことを知らないものは人間の不具である。

泣くこともなく、笑うこともない世界は疲れるだけである。笑ったがいい、笑ったがいい。肩の凝りがとれる。

高等女学校で講演する。小さなことで講堂が割れるほどどつと笑う。しかしちよつとした哀話でもすぐ泣きはじめる。心が柔らかだからである。若いからである。

泣きもせず、笑いもしないのは、老人の、しかも教養のない人の集まりである。

まじめくさった中の滑稽味、子供の所作や言葉の中の滑稽味、滑稽は、人間の安全地帯である。

私は滑稽味のわからない人とともに住むのはおそろしい。

「おじさんの馬鹿やい」子供は平気で言う。大臣にでも平気で言う。

「何！馬鹿だ！人を侮辱すな！」と怒る人があれば恐しい人だ。

力を入れなければならぬのも人生だ。力をぬかなければならぬのも人生だ。入れている時にぬき、ぬいていい時に力こぶを入れる。人間の貫禄はここらでまゐる。

ふんどし
禪を送りかえされたのを、菓子箱と間違えて仏様に供えたという話、

自分の好きな「小豆の味噌だき」の壺を食べておきながら、「これはまあ私の壺には、入れるのを忘れられたもので」と二度もらうのがくせであった坊さんの話、

人格のうるおいとしてその人をなつかしく思わせる。

弥次、喜多の話は、人間の笑いの結晶であろう。

滑稽気分で言ったことが、悪意でとられる。本気で言ったことが茶化される。ともに人と人が傷つきあう。

人が悪意でしかけた喧嘩をも笑って軽く受け流す人、この人が本気になったときたら、どんな仕事でもやりとげる人だ。この人に限って笑いから遠ざかることはない。

治まる家は笑う。笑った時は皆が一つになる。福が来るのも当然である。笑い得る者だけが、安らかに食い、安らかな眠りにつくことができる。

浜口さんは容易に笑わなかったという。だが絶対に笑わなかったのではない。あのまじめな大きな風貌かおが漫画になった。漫画はユーモアである。漫画にならない人は、どんな知恵者でも、大きな器にはなれないという。

ユーモアを解しない人は人生を解しない人である。余裕のない人である。あまり文句が多すぎる。

電車の中で足を踏まれたぐらいは、相手を打ちなぐったりしないでも、相手をあんまり恐縮させずに、「いや、どういたしまして」ですましたらどうだろう。

親は子を思い、子は親を思う。それに変わりはない。だが、親が真の親であり得ることができようか。少くともこの反省は、親にもほしいと思う。

父が死んで五年になる。早いものである。

私は、私の背に父の写真をかかげ六月中を拝んだ。父は毎日私に教える。

追憶する父には少しの毒もない、ただ聖なる如来へとひきこまれる。じつと見てみると、胸の底から熱いものが込みあげる。

私は辛苦な時、父を思い出すと楽になる。

私は孤独を感じる時、父を思い出すとにぎやかになる。

父には我慢がなかった。我慢がないから世のいわゆる成功がなかった。だが、なんとその晩年の光輝に満ちていたことよ。

父は終生、夏になつても絹の羽織を持たなかった。私の古い銘仙の羽織を喜んで着て歩いた。美しいトンビも、時計も、衣服も、ついに一生身につけさせてあげる時がなかった。だが一回でも、いい着物を買えと言ったことがあるか。

芝居に、映画に、遊山に行かせよと求めたことがあるか。そうした一切で不平な顔を見たことがあつたであろうか。

私は広島での講演には、父さえ聞いていてくれたらいいと思つていた。「兄や、ありがたい講演だったのう。」今もその声が耳に残る。

父は死ぬるまで求める人であつた。誰の前にも、したがって子の前にも。

父が聞いた最後の法話は「聖道の慈悲と浄土の慈悲」だった。

しかもそれは、父の生命だった私の口から話し出された法話だった。

「俺はまだ、お前たち子供に教育は受けんぞ。」そう言うて渡つた親の晩年は、沙漠のように寂漠であろう。

幼くして親に習い、若くして師に習い、壮者にして社会に習い、老いて子に習う覚悟、愚者はいずれの時にも処にも愛せられる。

父は念仏の人だった。誰が見ても、いつ見ても念仏の人だった。

道楽もなかった。趣味もなかった。仏をおいてほかに何もなかった。

父は、忍従の人だった。どんなつらい時にも、無理を言われる時も、馬鹿にされる時も、貧しい時も、よく忍従する人だった。仏説によれば、かかる人が有力大人である。

おそらく、兄弟だれでも、父には「ああ！」という感じ、同情の心、もつたいないという心がおこるのは、この忍従の徳のゆえかも知れない。

父は感謝の人だった。世界一等の幸福を自覚した人だった。

お金たった一円、「くれるのか。」父よりもあげた方に涙が出る。

父は働いた。一生働きぬいた。六十九歳までは事実上の戸主であった。そして一生涯、辛苦のし通しであった。その念仏は、七十四年の辛苦に洗われた念仏だった。

父に孝行するのは容易だった。

ただ、私が念仏に生きること、私が如来にまで生きることそれ自体であったから。

私は私の弟妹たちが、だらしのない一生涯を行こうとする時、最後は父の呼び声に翻然として自覚の天地に帰ることを信ずる。

父は一言も高飛車な説教をしなかったがゆえに、一番雄弁に、われに語る人である。

親の相の上に鬼の相を見せられた時、子の純な心は、素朴的な孝の心を蹂躪ふみにじられる。再びこの子が孝の天地に出るためには、悲痛な宗教的転回、精神的革命を要する。多くの人は親に対する反逆心だけで終わる。

私は父によつて、私の孝心を蹂躪されなかった。もし、かくも親を思うこと、それによつて念仏の天地に誘われて生きることが父にとつての孝であるならば、孝は父が成就したのである。

毎夜続けて父の夢を見る。

年ふるままに、日に日に新しく、父は私に教え、私に近よる。私はまた年々、父のような生活のできないことを悲歎する。

「穢国ニ必ずスル」という世界を語る時には私は必ず、父を語る。父は如来大悲のように私になつてくれた。死んだ後、いよいよ私に還相することを感得する。

型をきめて、それに私を入れようとしなくて、私を自由の野に放つて、私になる父である。

私が行けば、火の中へでも、氷の中へでも、笑つて入つてくれる父だった。

私は父を思っていると、無条件に、涙にさそわれる。その涙は、深い深い地下水に通ずるものであろう。念仏、合掌、餓鬼、感謝、白道……そうした多くのものが、しかもたった一つの強い力となつてこみあげる。

ああ。父の往つた道、それは親鸞聖人の生きたまう道だった。

私もまたこの道を細々たどらしてもらうのだ。

「お父さん！」私が心にささやく日、私の前にははっきりこの道が見える。

そうして、だれにもない苦衷をも、語る事ができるのは、ただ父の胸中においてである。

それは、聖人にふれる心であり、芭蕉に、良寛に、一茶にふれる心であり……寂しくても静かな、微かな喜びと光、じつとりぬれた心である。

無想録 十四 感情

理論と感情、この二方面を持つのが人間である。正しい理論と、美しい感情、その一致したところに美しい生活がある。

理論の上の間違ひは、さほど大きな暗やみを造らないが、感情の間違ひでは、深刻な暗黒界を展開する。悲劇は、多く誤あやまられたる情の世界にくり返される。

論理では承認しても感情が承知せぬ。理論では分裂しないでも、感情では分裂する。理論闘争がいつのほどにか感情闘争となる。

情は熱いという。確かに熱い。

だが、情は熱いととも冷たい。時には氷よりも冷たい。

時に洋々たる大河のように大きく温かくゆたらかに流れては、大人格を成就するの感情である。

時に冷たく、鋭きこと髮かみ剃のごとく、自らを殺し、他を殺すもまた感情である。

感情をぬきにしては一切の問題が考えられぬ。

感情を問題にしない人の事業は必ず失敗する。

「俺は嫌だ」修養のできていない人ほどの言葉が多い。少しも好き嫌いのないのは、愚鈍であるか、大聖であるかである。人間なるがゆえに好き嫌いがある。けれども、あまりに好ききらいの多いのは病気である。

悪む心はいけない心である。

しかし悪にくむべきことを悪み得ず、その深刻な憎悪の心と戦いぬくことのない人には、深い人生はあり得ない。そもそも本質的な道もまたあり得ない。

悲しみ泣くことは嫌いであるのだが、悲しむべきことを悲しみぬき、泣きぬかない人は恐るべき人である。一人の男の子の放蕩を苦にした父が、弟妹三人を道づれにして自殺した。四つの棺を送った男の子が、一週間たつかたたない間に平気で笑っていたとしたら、その子の前途を恐れずにはいられない。

感激。感激のない者に生きた人生はない。

感激のない者に尊い仕事はない。献身的な実践はない。

熱しやすき者は冷めやすしという。だが、一つの感激が、一人の人を十年支配したらどうする。五十年を貫流したらどうする。しかしてわれらは、こうした人をあまりにも多く知っている。

書物を読む、感激がない。講演を聞く、感激がない。仕事をする、感激がない。家庭に帰る、感激がない。その時、そこにただ呼吸と食事をつづける屍体しかばねが動いてい

る。正しい感激が失われた時、とりとめもない暗いわびしい生存が続く。そこに意義がなく、力がなく、安らぎがなく、希望も光もない。女はヒステリーになり、男は自暴自棄になる。

今ごろのように社会的に、経済的に逼迫してくると、生きるのにはずいぶんと力がある。

行きつまった客観も問題である。だが、それを打ち開くのは、われらの生活力である。努力である。

火事も問題であるが、火事場で周章あわてすることはさらに問題である。

行きつまった境遇よりも、それを打開して生きぬこうとする強い情意のないことこそ問題である。

正しからざる情に流されることは、それ自体、迷いであり、流転である。行きつまりはこの迷妄の感情より生れる。

涙は、感情の象徴である。

法界を莊嚴するような美しい情も涙となって光り、

地獄を出現するような惨憺たる情もまた涙によつて現される。

涙に徹することは、人生に徹することであり、われに徹することである。

女はよく泣く。そしてしばしば泣く。感情細かなるがゆえに、よく泣くのである。繊細デリケートなるこの涙の中に、真実の愛がただよう時、人生の隅々を生かす尊い力となる。もしこの細かなる涙の中に、毒素を含む時、一切を殺す恐しいものとなる。

万人を合して一つにするのも感情であり、

一を分裂して十にし百にするのも感情である。

人は人を褒めるとともに人を罵る。

罵りはするけれども、心の底には、それを好まぬ何者かがひそむ。

他人の悪口を言いたてて、運動する者の仕事広がっていかない原因がそこにある。

悪口や罵倒によつて、一人の味方を得た時、他に十人の人を失っている。

南無阿弥陀仏になりきつたのが聖人であった。その信には、正しくはつきりした、概念の骨格があつた。しかしその概念は、熱き直観と一致していた。宗教的理性と感

情が完全に一致していた。教行信証の正しき概念が信を指導し、熱き信の火が、概念の全体を生きた力にした。

正しき論理によって感情は指導さるべきである。迷妄なる情に流さるべきではない。われらが求道し、哲学するのは、感情以上の指導的地位を発見しようとするのである。

情は、毎日のお天気のように、晴曇変化に富む。しかもわれらの進むべき道は一本である。曇った日に旅をせねばならぬこともある。見えている理想すら棄てたい日がある。だが、晴雨にかかわらず進むべきである。

情に勝つことはわれに勝つことである。

笑うならば、天を貫くほど笑え。

泣くなら地軸に徹するほど泣け。

感情が人生の本質にふれるためには、冷たき眼が光っていねばならない。何ものにも動かされない信の立場が必要である。

無想録 十五 秋

垣根の朝顔、色ようやくあせるころ、秋は静かに、万象の上に歩みよる。

かの堪え難き猛暑も、夕べ一陣の秋風に洗われて、人に蘇生の思いあり、天高くして馬肥ゆるの秋、人はたして肥ゆるや否や。

人肥えたるを尊しとせざるごと、あたかも山高きをもつて貴しとせず、樹あるをもつて尊しとするがごとし。

学ぶことなくして、何の人生ぞや。思惟なく、勉強なく、精進なく、道の行持なくして、何の人の尊貴ぞや。

虫声夜もすがら聞こゆ。夜色沈々として更けるころ、灯下静かに経巻を開く。一字躍り、一句輝く。

われ、真理を求むるにあらず、かれ、われによびかけ、働きかけて、われを無碍の天空にさそい、あるいは千仞の魔谷にさそうのみ。

思い千々にくだけて、ただ、感嘆の声の湧き出づる時、かれ、われにあるか、われ、かれに生くるか、法界ただ寂々として、かれありて名告るのみ。われ生くるにあらず、ただかれ生くるなり。

そこに善悪なく、賢愚なく、美醜、淨穢なく、円融にして無碍なる、光明の大海あるのみ。

ああ。祖聖をして「廣大難思の慶心」と叫ばしめたるもの、これなるか。

悲しみてもなお余りあるは、愛する者の、ただ凡情迷情に悲愁して、かの至尊の声を聞かず、輪廻の身を知らず、ただ宮々として蝸牛角上の小事に囚とらわることこれなり。

尊者大目犍連だいそくけんれん、十余年会わざりし母を訪えば、悲しや母は餓鬼道にありたまいしと。色餓鬼、名譽餓鬼、地位餓鬼、財慾餓鬼。一度彼岸に飛躍して、人間の現実を見れば、大地は所詮餓鬼道にほかならず。

妻を見て泣く夫、夫を憶うて泣く妻、子を見て悲しむ母、母を見て悲しむ子供、ただ目連尊者一人の涙にはあらざるべし。

内省沈々、汝自身を寂光によつて懺愧する者、いくばく。秋の夜は「汝よ汝にかえれ」と誠むるもののごとし。

唯一絶対なる彼岸の前に合掌して、無限に彼岸に生きんとする。祖聖のいわゆる「往相廻向」がそれである。

自己を無限に高めんとし、豊かにせんとし、何ものかを求めて、わが精神の滋養とする。この先天的な性を称して、教育家は「自己陶冶性とうやせう」という。

この自己陶冶性は崇たかき文化、絶対価値を思慕してやまず、これ人の人たる特権である。

もし人にして、この主流を退き、文化の予後備線に入らんか、かれはすでに生きることの特権を棄てたる人である。

強烈なる文化的思慕に燃える者のみ、よく教育者たり得ることができ。しかるに何ぞ、教育家にして自己陶冶性を失い、文化的思慕の消滅せる人形の多き。

たとい年齢は三十に満たずとも、かかる人を若老人わかとしよりとよび、老朽とよぶ。生の輝きと、喜びと、尊厳は、この人より去る。

世に天才とよばれる者あり、天才とはただよく精進し努力し、不斷に自己陶冶の火を消さぬ人のことである。

懈怠と放逸と我慢との中より天才生まれたる例なし。未来の天才は今この秋の灯火の下より生まれん。

夏の夜を、浴衣にて浮かれたる者も、秋の夜のもののあわれ、襟を正して声なきの声を聞くや否や。

「合掌。ただ今は激励のみ言葉有難う存じます。沈黙合掌、ただ感慨無量でございませ。聖講習会の追憶、あの大広間の雰囲気、先生のみ教、なつかしい皆様方の真剣な求道態度、そうした追想は、またしてもグウタラな存在を続けている私の魂をぶつてぶつてぶちのめします。高慢なるわれの全体が、粉微塵に打ちこわされて、大地にひれ伏せられた聖一週間の追想は、ただ限りない懺悔と、限りない感謝を持ちます。感激のすべてを、感謝のすべてを、合掌こめて厚くお礼申し上げます。ご期待にそむかぬよう、できるかぎりを働かせて頂きます。団の真精神を念頭において。先生のいらつしやる日を楽しみに、お待ち申しております。」

この人あるか。われこの人を知る。しかしてこの人は、ただこの一人にはあらざるなり。

夜半静かに思いを各地の聖友の上に馳す。

「自動車の嫌いな私が珍しいことに酔いもせず、退屈も感じないで、いつの間にか当地へつきました。それは私の心の中へ、先生をはじめ講習員諸兄姉が入りかわり立ちかわりお見舞にお出で下さつて、ある方は策励し、ある方は慰藉し、ある方は冗談を言い、泣いたり、笑つたりしていましたから。」

これは慶沢和尚のお便りの一節であるが、けだし、禅師一人の心境にはあらざるべし。

「先生よ、慶沢はまた、道元の言葉をかりて、慶沢に言い聞かせねばなりません。何もつてのゆえに、慶沢はそうなつて居りませんから。」

かくのごとき卑賤の身命を持ちながら、あくまで如来の正法を聞かん。道にいかでか、この卑賤の身命を惜しむ心あらん。重く尊からんとも、なお法のためには身命を惜しむべからず。いわんや卑賤の身命をや。

惜しんで後、何物のためにか捨てんとする。

凡そおよ為法、為道のために惜しまず捨つることあらば、輪王よりも尊かるべし。上天よりも尊かるべし。凡そ天神地祇三界衆生よりも貴かるべし。

静かに思うべし。正法世に流布せざらむ時は、身命を正法のために放捨せんことを願うともあうべからず。正法にあう今日のわれらを願うべし。

正法にあうて身命を捨てざるわれらを憐れむ。恥ずべくはこの道理を恥ずべきなり。

仏祖の大恩を報謝せむことは一日の行持なり。自己の身命をかえりみることもなれ。

「諸仏の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。わが行持によりて諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり。」(道元)

われはまた、千草にすだく、幾十百とも知れぬ虫の音に耳を奪わる。

ああ。この微妙なる自然の樂の音よ。

鳴くは、もちろん松虫、鈴虫、くつわ虫等々に違いない。しかし、虫の音によつて秋を知る。

秋名告るなり、虫声を通して秋名告るなり。単なる虫の声にあらず。秋自らの声なり。

念仏はもちろん、衆生の上であり、されど、南無阿弥陀仏は如来の不行なり。

念仏とはただ、如来自らが衆生の上に名告りたもうにほかならず。

若人よ！ 秋の夜を沈黙せよ。しかして、読めよ、考えよ。

青年よ！ 秋の夜を思惟せよ。しかして、二十五歳にして哲人たれ。

若き日の幾年を、眠らず、食わずして学びたる心血の歴史を持たざる偉人あることなし。

秋は来る。若人よ、真剣なれ、汝自身の建設のために。

無想録 十六 不思議

多くの寄贈雑誌の中、四国から出る「×光」が机上にあつたので拝見する。「満州事変に絡まる奇談三つ」と最初に出されている。その内容は、一、奉公袋に現われた神馬の毛、二、主人の身を案じた愛馬の霊、三、身代わりになつた鎮守の護符、というのだ。読んで私は吹き出した。堂々仏教中の仏教、浄土真宗を宣説しようとするこの雑誌が、まるで迷信宣伝だ。これが巻頭にのせてあるようでは、いかにお念仏のありがたさが出されてあつても、十九願二十願の世界であることに間違いない。化身土巻を再三お読みになつたらいかが。

南嶺の戦いの時、岡野一等兵が弾丸にやられたと思つて昏倒した。気がついて見ると、腹巻に入れた八幡神社のお守りが身代わりになつて、その真つただ中をうちぬかれていたというのだ。これでは満州や上海で命を捨てた勇士たちは浮ばれない。かかる思想、およびその思想伝道家こそ、正法の剣に血ぬるべきわれらの敵国である。

こんな科学的無知の迷信狂が、さらに、盲目的神秘の上に躍つて念仏する。阿片だと言われても仕方がない。親鸞聖人の「不可称、不可説、不可思議の信」とは似ても似つかないものだ。

いつかの「中外」の記事だつたと思う。万年筆に弾丸があたつて命拾ひした兵士がある。本願寺のお名号でなかつてよかつた。迷信が一つ増すところだつたと。ところろが、さる高等女学校から出る堂々たる仏教雑誌に、お名号に弾丸があたつて、仏に救われたお不思議が載つていた。私はその時にも苦々しいことに思った。

なぜ草木は緑色であるか。科学者は緑であることの様子を微に入り細に入つて説明する。いよいよわかればわかるだけ、ほんとの不思議が増す。こんな世界を批判的神秘とよぶ。しかしそれは不可解ではない。人間が太古未開の庶物崇拜アニミズムの時代には、因果関係がわからぬために、何でもかでも不思議であつた。何でもかでも恐しかった。その恐しいものや不思議なものを神にした。多神教がそれである。馬の毛が奉公袋にあつたの、お守りが身代わりになつたの、こんなことを信じている頭は、太古の野蛮人と大差はない。もっと積尊の智慧の世界を知つたがいい。一定の強さと角度をもつた弾丸が人体に入つてあたる。それは物理的法則に支配される機械的因果関係よりほか、何でもないのである。こんな記事を載せて、恥とも思わぬ仏教徒？からどうにかせねば、仏教が減ぶのも当然だ。

命拾ひして感極まつて鎮守の森を拝むような、ご自分一人に都合のいいご信心を捨て、お守を捨てて、笑つて死線を超えて生きゆく絶対信だ。仏は智慧光……自覚よりほかの天地に顕現せず。

馬鹿者どもの世界に姓名判断というのがある。「清永」とは清く永く生きるということ、あなたはどうもその家柄には相応しない。住岡狂風とは、岡に住んで風に狂う、いや大変な勢いで……運命論者の群が、姓名判断博士を祭りあげる。近頃もある葬式の時、人もあろうに禅僧が、新仏はお名前は「朝代」か、なるほどご短命ですな、このお名ではと、食事中、皆の姓名判断をやっていたとのこと、この禅僧こそ、仏教の面をかぶる外道なのだ。

ある大学出が、「子供があいついで病気になるので、これではもう科学の力ではないか」と思いました、近頃はお大師さんを信仰しています。」と恥ずかしそうにもなく言っている。超科学と反科学、超因果と反因果とを間違えたあほうだ。仏教はそんな所にはない。

社会環境の行きづまった今は、特にこうした、盲目的神秘をかつぎ出して俗衆をひきつけるにいい時だ。だが、われらは静かに正法を念じよう。

無想録十七 生活の三階段

徳山の遠石の石田家の講演がすんで帰る時のことであつた。忙しい私は明日を有効に使いたいために夜行で広島に帰ることにした。それはいつものことだ。夜十二時すぎの汽車であるが、その発車よりも三十分以上早い時間を頼んでおいた。ところが、自動車が出来ない。門に出て待つてっていると、やっと来た。私の時計では発車まで二分しかない。万一を思つて乗ると、走るは走るは、半里以上もあるのを二分で走つた。駅に着くと、汽車はするすると発車しつつかつた。その次の汽車まで待たねばならない。お見送り下さる皆様が何もしないで待つて下さる。総勘定するをたいした時間だ。そして私にとっては明日の仕事にそれだけの損だ。そう一分早かつたらこの時間だけ損をしないですんだことだ。

十月二十五日米子支部に発つ朝、夜の三時半の汽車に乗らねば、昼席の鉄道局後藤工場の講演に間に合わない。だがタクシーは前の日に頼んだとおり、三時前にぴたと来てくれた。拝みたいほど嬉しかった。何ものにもかえられない。私は将来、少しは高いにしても、このタクシーを頼むであろう。

当然しなければならぬことをするということ。われらの充実した生活はそこいらなされなくてはならない。

妻には妻が当然しなくてはならないことがある。夫には夫として当然しなくてはならないことがある。子には子、親には親、兄には兄、弟には弟、それぞれがなさねばならぬことがある。この当然なさねばならぬことから実行して、はじめて私の生活が生きてくるのだ。だが、われわれは考えて見れば見るだけ、当然なすべきことをすら、あまりに多く怠つてはいないか。

当然なすべきことを怠つていような時、その放逸なわざりの相の後には必ず何か嫌なものか、単食たんじきつていよう時である。

夫が会社から疲れて帰つた時、気を腐らして帰つた時、いそいそと妻が洋服をとる、当然のことである。その当然のことが夫の心を明るく転換する。

その時もし妻がヒステリーをおこして寝ていたら、ふくれ面して坐つていたら、夫の心はどうなるだろう。

親を「邪見な」と言う前に、親を上座に坐らせて、子供としての当然な相、合掌して尊敬して大事にしたら、親の心はどうなるだろう。

歩哨に立っている兵卒の前に、ナポレオンは、皇帝の相をかくして、警戒線を通過しようとした。歩哨は上官の命なしとて通さなかつた。ナポレオンは、その兵をすぐ
に重く用いたということである。

当然すべきことを、雨の日も風の日も、陰でも陽で、必ずやりとげてゆく人にして、
はじめて安心して事を托することができる。この人は必ず重んぜられる人である。

聖人たちが、道を広め、大法を伝導したのは、だれに頼まれたわけでもない。貧苦
と、迫害と、悪罵と戦いつつ、頼まれない仕事に全身を打込んだのである。

私はある日涅槃経をいただいた。釈尊に最後にお食物を供養したのは、ジュンダで
あつた。釈尊は哀れな自分をおそれ入っているジュンダに、ジュンダの供養の徳の尊
いことをおほめになり、尼蓮禪河にれんぜんがのほとりで正覚の時、ご供養した女たちと、同じ功
徳のあることを説かれ、多くの比丘たちは彼を讃嘆合掌して「南無ジュンダ、南無
ジュンダ」とくり返している。泣かずには読まれない。

その日だつた。Sさんから、こんな意味のお手紙を受けた。

私の家は今、破産して、田畑山林、借家も人手に渡り、本宅もまさに他人の手に渡
ろうとしています。先生のお耳をけがすのは心苦しく思いますが、私の村では、団の
運動は絶望である。しかし小さいながらも、熱のないながらも、光明団精神にむかっ
て精進するつもりであります。今後ともお見捨てなく導いて下さい。講習の決議、先
生に対する御恩、しかも家庭の事情で、私の本部建設費、金二十円也献金したいと思
います。しかも今月より月五円ずつ、月賦にして払い込ましていただきます……。

私はただ合掌した。この方の二十円のお金、毎月の月給からのご報酬、お金の中に
盛られたみ心である。

だれに強いられたのでもない。

人生に徹底し、信念に徹底し、はつきりと真理にふれると、必ず第三の天地がその
人のものになる。

論理を超え、能不能を越え、毀誉をこえて、無条件に、無報酬に、全身全霊を現前
の生活に打込んで生きてゆく。

身施とは、われ自らを献じて生きることである。

人生には、お金を出せば得られるものがある。

人生には口先で得られるものがある。

人生には少し小知恵を動かせば得られるものがある。

けれども、人生には、自己の全身全霊をなげ出さねば得られないものがある。

釈尊はそれを得られたのだ。

親鸞聖人は、自力以上の自力、一生をかけて、このものを獲得し、生活せられたのである。

二たす二は四である。だが人生には、一たす一は一という式を書いたり、一引く一は一という式を書いた、エマーソンやピタゴラスがいる。

人生には「零」という数がある。零こそは実に偉大であり、絶対である。

$1 \times 0 = 0$ $100 \times 0 = 0$ 何に零をかけても、ついにゼロである。ゼロは数の極である。

涅槃は「妙有」の本質たるべき虚無である。零である。虚無なるがゆえによく妙有を妙有たらしむるのである。だから涅槃は二かけの二は四と出る世界ではない。一切に普遍の光と命とを与えるゼロである。

涅槃が果であれば、信は因である。涅槃も仏性であれば、信も仏性である。涅槃にふれてゆくものは、純粹なる直観すなわち至純なる信である。涅槃が零であれば、信もまたゼロである、絶対である。

善悪、賢愚、苦楽、淨穢等々の対立、およびその囚われは、ただこの信の天地において、解消され開放せられる。信の人が、無条件に、全我を捧げて、無限の未来に生きてゆくのはそれがためである。

絶対無条件の努力精進、大報謝、大歓喜の生活は、ただこの信の人のみに与えられる。われらが団の使命「仏国土建設の大業」は、ただこの不惜生命の人によって成されるのだ。しかしてかかる信はただ、如来の本願力によってのみ生まれる。

人生のあらゆる社会は、実にこの人を待っている。

しかして真人生はただこの人の手にゆだねられる。

全我の自覚を通して承認されない一切の論理は、人生のための害毒である。

積尊は自覚以前にあらゆる力を認めることを許さなかった。

五官の享樂だけが人生である人たち、

なさねばならぬことを成しとげてゆく人、

無条件に生きぬく人、

人生はこの三段階の人たちによって複雑に構成されたにぎやかな交響樂である。

だが、何一つとして真理海中を出ているものはない。一切は真理によって明暗の二境を造って呼吸している。真理は、人間の自力小我が承認しようとすまいと、それ自体独立して永遠に生きる。

無想録 十八 年の暮

例年のごとく報恩講がすんだ。和尚や、正覚法印や、吉村好勝氏や、それに幡谷先生も一晩見える。その他各地の同胞も来て、なつかしい営みであった。私は涅槃経の序品と純陀品とを語った。

涅槃経は釈尊最後の説法であり、報恩講は聖人九十年の生涯をしのぶ法会である。その中に一脈のあるものが通ずる。寂の味がそれである。

報恩講がすむと、あわただしく今年も暮れてゆく。ものの終りは人を内省へ内省へとつれてゆく。

年の終り、終りにあらず、年の始め、始めではない。始めというも終りというも人の世のありようにすぎない。天地もとより始終なく、人生にあわただしく生死あり。生死に徹し、始終を生かす者のみ、生死、始終を超えて生きてゆく。

一年間をふりかえる。後悔はなきか。古の聖賢は日々三度わが身を顧みるという。年末にあたつて、一ヶ年を清算し、来年の覚悟を定めることは大切なことである。

十一月二十五日、萩市の史蹟を巡拝して、吉田松陰先生を祭れる松陰神社に参詣する。名は県社であるけれども、なんとお粗末な宮であることよ。境内には松下村塾がある。十畳半と八畳の粗末な二間である。やがて先生幽囚の室のある杉家を訪らう。ここにある三畳半の一室こそ、先生が学び、書き、公憤せられた部屋である。書を講読しつつ門弟とともに米をつかれた臼がそのままに保存せられてある。

やがて先生の誕生地杉家旧宅の跡を弔う。ここよりは、柑橘多き萩市は一目の間におさまる。後に護国山を負い、彼方海辺に指月山しづきを見る。ああ、先生はここに誕生し給いしか。やがて杉家、吉田家等の墓所に参詣し、松陰先生の墓前合掌久しくす。門弟、久坂、高杉等の墓もここにあり、しかもこの質素なる墓を見よ。一代の英傑の墓標は、一上等兵の墓碑よりも劣る。

多年の心願はとどいて今日松陰先生の遺蹟を目のあたり拝す。感慨無量。

田中義一大将の堂々たる銅像あり、伊藤公の粗末な銅像あり、しかして松陰のそれなし。先生は従一位にあらず、大勲位にあらず、公爵にあらず、されどこの萩における先生の重々しさよ。

明治の元勳伊藤、山県、品川、山田等の方々が、爛漫たる春の花であるならば、先生は雪まだ深き冬の底に動く力である。因である。ああ、偉大なる因位よ。

「我今国のために死す。死して君親にそむかず、悠々たり天地の事、鑑賞明神にあり。」

「かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂。」

「親思ふ心にまさる親心、今日のおとづれ何と聞くらん。」

「身はたとひ武蔵の野辺にくちぬとも、とどめおかまし大和魂。」

この心境を解せずして、志士ありや、英傑ありや。

堂々たる無生命の殿堂、天下に充つ、しかしてこの殿堂の中より百年に一人の人物出でたりや。ああ。松下村塾は十八畳半のみ。

「最高学府？」を出でたる人、天下に充つ。学あり、才あり、弁舌あり、健康あり、しかして一体何ものを欠ぎたるか。

安政五年先生二十九歳、父兄に対する訣別の書（先生常用の硯とともに松陰神社の御神体となれる書）の中に曰く

「神州の正気、既に邪気の消蝕する所となれるか。頑児一念ここに至る。食咽を下らず。寝蓐に安んぜず。」と。

国家の前途を思うて眠られぬと言ひ、食咽を下らずと言ふ。偉人は公憤す。

松陰先生の塾には左の訓條が掲げてあつた。

「万巻の書を読むにあらざるよりは、千秋の人となることを得ん。一己の労を軽んずるにあらざるよりは、寧んぞ兆民の安を致すことを得ん。」

万巻の書を読まねば名の残るような人物にはなれない。自己の努を問題にするような人物が万民を安らかにすることはできないといふのである。

勉学だ。精進だ。努力だ。捨身だ。人生はただそれだけだ。

先生は酒を飲まなかつた。煙草をすわなかつた。また深く書生を誡めて囲碁将棋を禁じた。また書画骨董の楽しみがなかつた。

これおそらく一事に専心努力せしめんがためであろう。将来なすあらんとする人の考うべきことである。

年末も努力、年始も精進、これのみわれに与えられたる喜びであり、大道であり、宗教である。

本部建設費が七百円集まつた。申し込みだけで送金がないのを合すると約一千円である。

堂々たる寄付募集をせず、喜捨名を発表せず、心からの浄財を求めた私は、この一千円に対して、深い深い感謝と、懺愧とを感じた。

尊い献供であるから感謝を禁じ得ない。ある意味での私の自己清算であり、人格の評価であるから懺愧するのである。

米子支部の十月大会は西念寺で開かれた。もと谷大教授、ながたにがんゆう 龍含雄師の寺である。師の父上を経丸師と言つた。本山の教学部長や、事務総長などまでせられた、有名な学者であり、人才であり、信仰家であつた。四十歳ごろ、西念寺に帰られ、門外不出を誓つて、毎朝の説教をはじめられた。暗いころから半鐘が鳴る。初めは寺内の人だ

けが聞いていられたが、一人増し、三人増え、ついに数年後にはあの無教地の米子で五十人の集まりがあるようになった。叱られたことのない含雄師も「今朝のような鐘の打ち方で人の心にひびくか。」とこれだけはきびしかつたとのこと。この五十人は真に生まれた五十人である。

そのころ、境から柳楽源七なぎらという人が、毎月定例の日に米子まで来て、夜席と朝席とを聞いて帰ってゆくことを続けていた。それから後のことである。源七氏は、自分の店を息子に譲ってしまい、あらためてその店の番頭にしてもらった。そして毎月七十円の月給をそのまま貯蓄していった。不況になつても息子もその金を取ろうともしせず、その金が大分たまつた時、源七氏は寺を建てることを発表して、心ある人の喜捨を求めた。そしてできたのが、西念寺の出張所、境の真光寺である。もちろん経丸師が亡くなられてからのことである。

この話を思い出した私はお恥ずかしくてならない。

本年中、いな三十八年間、私をお助け下さった尊い方々のことを思いつづけると、心全体にこみ上げてくるものを感じる。ただ大法を限りなく自他の上に生かすことによつてこのご恩に報いたい。

無想録 十九 自然

春が来て花が咲き、秋が来て紅葉が散る。天地自然の運行がある。花が咲いて天地に銜気げんきもなければ、雪が降って誇り顔もない。

人間のすることには無理がある。

無理のあることは死んでいる。

無理をおし通すことを邪見という。

涅槃経に曰く「一切の悪行は邪見なり。一切の悪行の因無量なりと雖も、若し邪見を説けば、則ち己に撰尽しよつじんしぬ。」と。

恐るべきかな、邪見。

邪見の人、この人こそ、世を苦しめ、暗くする中心となる人である。己一人の勝手のために人を責め、己一人の権力のために、圧制を通す。棺蓋かんふたを覆うて後、この人の柩ひつぎに飾られるものは、唾棄たきと悪罵のそれである。

世に安心のできる人物と、安心のできぬ人物とがある。

自然の公道に終始して、動静自然なる人は安心ができ、表と裏とがあつて、邪見不自然な人には安心ができない。この種の人は必ず、公金を私したり、得手にまいらぬと反逆したり、一の反感によつて、十の恩も百の怨うらみで復かえしたりする。

悪のひそむ時、必ず不自然である。

48

親鸞聖人は八十六歳の時、自然法爾章をお書きになった。十八願の心を一番はつきり出されたものである。聖人の円熟をとげた信境である。若々しい円まどかな心の全体である。

芽を出した一本の木、それを殺さない以上、その芽を葉を、木の中におしこめるわけにはいかない。

一切の業報を超えて、よびかける真実に生ききろうと、一念、芽をきつたならば、それをもとどおりにおしとめるわけにはゆかない。「他力といふは如来の本願力なり。」その自然の本願力は、いかに碍さまたけても、おしこめても、不退である、無碍である。

一茎の草花にも天地の全体が孕はらまれてあるように、一人の人の上に芽生えた願生の魂の上には、尽十方無碍光如来の力が打ち込められているし、無量寿の生命が流れている。

私は悪人であります。いつ何をした、今日こんな悪い心をおこした。それを、そこをお助け下さるのがお慈悲だと、とつてつけて喜んでいる人が多い。けだし二十願の

だましもので、痩せた体に滋養物をすりつけて喜んでいるようなものである。不自然のことこの上なしである。

二十願の世界でかたまると再び濟度ができなくなる。聞いていても、気に入る処だけ聞く。

「先生、罪惡を説いて、弥陀の本願に毛一本加えられない所をやりんさいよ。わしらは、そこは出とるが、同行等が可愛いから」と、天晴あっぱれお同行が言った。気の毒なことながら、この種のお同行を見つめてごらん。仏の生々しい血潮の流れは見られないから。入学すべきものが卒業したのだ。

一つの型がある。それを後生大事に持つておつて、それに合わせて見る。少しでも型が崩れそうだと、講師の方へケチをつけて「異安心」だと言う。これが一番多いのが安芸や石州である。石州でなくても、至る所に自然の生命の枯れた型いじりが満ちている。

自然は生命の内部から必然に動き出る力である。

聞くことによつて、自力の大地を破つて、願力自然の信の生活が生まれる。

この真如一実功德宝海の内奥から生まれた願力自然の力と一体でないかぎり、けつして救われたと言わない。仏教は極難信である。

茶道でも、作法でも、獲得されると、型に入つて型を出す。得たとは、自然になりきることである。ほんとの自然は平凡であつて非凡である。非凡にならなければ、平凡にはなれない。

映画を見にゆく。銀幕上の人たちは泣いているのに、見る方は眠たくなる。

映画に無理があるからである。作つて泣いているからである。もう一つはつきりとした論理の骨格がないからである。

はつきりとした論理の骨格が内にあつて、血と肉が盛つてある時、あまりに自然で、観ていること、泣いていることすら忘れていく。

聖人は自然法爾の信を絶唱されたが、しかし、その背後には、教行信証の骨格があつた。

論理をきわめて論理を超えはてたところに、自然法爾の信がある。

聖人が幾百年の後、真に人生を生きようとする人によつて絶対の尊重帰依を受けられるのは、その生活一切が高き自然の領域から生れ出ているからである。

何も仕事をしなかつたはずの父、何事も言わなかつたはずの父が、死後七年、地上のだれよりも、私の精神内容に迫ってくるのは、無理がなかつたからだ。如来願力の自然だからである。

真の迫力は、自然にあふれた力の上のみある。

迫害してみても、排斥してみても、自然の迫力の前には頭の上がりようがない。声が大いなのが力でもない。策略が力でもない。自然の迫力は、そんな稚気からは生まれない。

自然の力が流れている以上、必ず枝が伸び、葉が茂り、花が吹く。これ私が、若人たちに、何をせよというよりは、自然の力の満ちた信の人、腹の人を作ろうとするゆえんである。

一切の重圧をはねのけて、起ち上がって生きる人物が、私の話を聞いてくれた人の中から現れるはずだ。その人たちが、あらゆる社会相の中に食い込んで生きた仕事をしてくれる、私の真の喜びはそこにある。

生き方が自然だと、生活が遊戯ゆげさんまい三昧になる。

私は今日まで私の力一ぱいやらねばならぬようなことに出遇つたことは一二回しかない。

しかし、考え方を変えると、獅子が兎一匹とる時も全身の力を用いるように、私は50一切の生活に、例えば老婆一人と座談する時でも、私は私の全体を打込むことを心掛けている。

自然だと力みがない。どんな大問題に打ちあたつても、力みかえさなくてもいいよ
うな人になりたい。

垣根の瓢箪を見てさえ、武士の命たる刀をひきぬいて斬つた武士、飯のたき方がま
ずかつたとして妻をたたく男、自分の力一ぱいを毎日使っている。

書道でも、茶道でも、武道でも、話術でも、皆その極意は自然である。宗教もとよ
り自然である。箱から出され、鎖をきられ、自由な天空に放たれた時、だれ一人見て
いない時、白刃の下に立つ時のように余裕も何もない苦悩がおしよせた時、何が一体
飛び出すか。その時、そこに生きていたものだけが汝の真の汝である。

信仰は自然法爾だとはまことに至言なるかなである。
箔はくやお化粧は自然ではない。

無想録 二十 十八願のこころ

大無量寿経は、十八願のこころを説かれた真実中の真実教である。久遠の真実が、釈尊を通して名告っている経である。

如来は人間のはからいを待たずとも、いつでもどこでも名告っていられる。正覚の大音は一切群生の上に響流している。

念仏とはこの名告るみ仏のこころを聞くことである。この如来の招喚のみこころを聞くところが真実の大信である。

お名号の招喚を聞くところに少しの不純な雑り心があっても、十八願のこころは失われる。南無阿弥陀仏の不行を受け取るこころは、本願真実のこころ、すなわち如来の大信心である。

仏を念ずるものは仏心である。大無量寿経は、仏仏相念の経であった。

如来を念ずる心に如来の本願があり、念ぜられる彼岸の仏が南無阿弥陀仏のお名号である。

「彼の岸に招びます名号はそのままだに

地に我生かす本願なりけり。」

本願は、至心、信樂、欲生のみ心である。法蔵菩薩の聖なるみ心である。

そして信樂はそのまま衆生の大信心である。衆生に廻向したもう如来心である。

信心をもつて如来の本願に救われようとする心、その心が如来を裏切る自力のこころである。

如来の本願こそ、至心、信樂の信心にてましますのだ。

信心をおこして、南無阿弥陀仏を頂こうとする心、南無阿弥陀仏を二十願の真門にしてしまうのである。南無阿弥陀仏すなわち信心である。

聖人は「大信海」と言われる。信心は、如来の広大なるみこころなるがゆえに海にもたとうべき、底なきこころである。

南無阿弥陀仏に生きるとは、この広大なるみこころに生きることである。

お念仏は大善であり、至徳であり、聖人のいわゆる「真如一実の功德宝海」である。善として備わらざるなく、徳として内具しないものはない。

であるからとて、大善至徳なるがゆえに、これに執着すれば、十八願のこころは失われる。

ただお名号の招喚に生くべきである。

一遍上人が由良の法灯国師の所に行かれて、

「唱うれば、我も仏もなかりけり、南無阿弥陀仏の声のみぞして」

と一首出されると、法灯国師はまだ「声のみぞして」と声が残っていて不徹底だと言われた。そこで工夫に工夫を重ねて、「唱うれば我も仏もなかりけり、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と出されると、国師は初めてほめられた。

能所一如、称える衆生と、称えられる仏と、そこに微塵の隔りもゆるされぬ。能念、所念、ただ南無阿弥陀仏一体の中に没入して、仏我一体の境。

「親しといふも猶おろかなり、近しといふも猶遠し。(南無阿弥陀仏) 一体のうちにおいて、能念ねんじて 所念ねんじられてを一体のうちに論ずるなりと知るべし。」(『安心決定鈔』)

春は花の上において春を成就し、

如来は衆生の上において功德を成就する。令諸衆生功德成就とは、本願の御はからいである。

功德は、衆生の善悪を除いて成就されるのではなくして、善悪をそのまま功德に転ずることによつて、功德を成就するのである。

悪を廃やめて善を修し得るといふ自惚うぬぼれのある世界には真の念仏はない。

廃悪修善の世界の極致は、久遠の業障に目覚めて、如来自然の浄化聖化の本願力の生きますところに開ける。

如来智慧光による大否定、全否定によつて、人間の一切善悪が生かされるのである。悪を転じて徳と成す。転悪成徳だけが十八願の世界、いな、大乘の至極、一仏乗である。一切衆生悉く度わたさるべき弘誓である。

古往今来、生物の死骸や、糞尿がどれだけでできたか知れない。それが土になつて一つも残つていない。科学者が、バクテリアの作用だ、風化作用だと説明しても、人間の理知以前に天地に実在する妙用にほかならない。

善人も悪人も、褒める者も貶けなす者も、殺す者も生かす者も、賢も愚も、敵も味方も、善悪、賢愚、愛憎、等々の一切を超えた、深いところで一つに生かされる世界、それが十八願のころである。

腹を立てるなど言われても時によれば癩しやくにさわるし、欲をおこすなど言つて聞かせても、欲ばかりであるし、愚痴もおこれば何でもおこる。

だが、悪口言われたと聞いてもおこりきれないし、悪にくんでみても悪みきれないし、おかしい心が念仏している私の心である。

「雲のかかるは月のため。風の散らすは花のため。」

歌の文句ではないが、それぞれが尊い役目をはたしているらしい。ただ人間は、勝手のいい時、善の名をつけ、勝手の悪い時、悪の名をつける。善悪を超えなければ善が見えないし、美醜を超えなければ美が見えない。十八願のころは、善悪を超えて善を、淨穢を超えて淨を、賢愚を超えて、如来の智慧に生きる世界である。

眼先き一寸ほど見えて、善悪をつけると、十日たたぬ間に悔いが来る。眼先き一尺ほどを捕えて、価値を定めると、不用なものが沢山ある。

嘉永六年、黒船をつれてペルリが浦賀に来た時は、幕府の役人はあわてたことである。今日から見ればそれが何であつたかがはつきりする。

如来の智慧は、久遠から永遠への長い眼で今日のいかなるものでも生かされることを告げられるのである。

如来の本願に生ききつて「善悪のこと総じてもて存知せざるなり」と仰せられた聖人のみ心を拝まずにはいられぬ。

本願の心は柔らかな心である。だが弱い心ではない。

凡夫の心は、堅くて弱いところである。

いかに強いようでも、压制や、反逆の心は、真に強い心ではない。

いかに弱く見えても、真の忍従や、合掌は、一番強い相である。

仏心より流れ出る、智慧と慈悲の行者でなくては、忍従も合掌も生きてはこないからである。

光明団の思想が古いと言った人があるそうだ。まことにそうであろう。

ただ、十八願のころに生きることよりほかに道のない私には、どうも仕方ないことである。

十八願のころは、大聖の大寂定より名告り出で、億々の凡聖の魂と生活の中で、思惟し、選択し、願生してきた、永遠の生命の流れである。

ただその純粹なる生命の流れである。

生まれた者の中に、生まれたことのないものが生き、

死ぬる者の中に死ぬることのない者がささやく。

生まれた者が、生まれた者であることに徹し、死ぬる者が死ぬる者になりきる時、生まれもせず、死にもしないものが、われになりきりたもうことがわかる。

諸行無常になりきることが、そのまま常住なるものに生きることである。

十八願のころである。

現世を祈る心は、人間の心である。無智と、幸福を求める人間の当然のころである。

いかに禍に満ちても、現世を祈らないで、そして自暴自棄に陥らないで、最後まで、ありのままを抱きしめ、背負いきって歩みつづける人の足跡には、人類をうるおす尊い血が流れている。

「あれを見よ深山みやまの奥に花ぞ咲く、真心つくせ、人知らずとも」
人も見に来ぬ山奥に咲く桜、その花の心を知るや。黙々の努力の人。
花咲かずして、賞讃を求め、生ききらずして憤る。
何ゆえにわが心と語らざるか。
わが心、わが心を信じ、われ、われと語る者、やがて仏と語る。
十八願の心にはゆとりがある。

庭の桜の木に、花を咲かせてくれることよりほかに謝礼は求めぬ。
十八願の世界では、念仏の華に生きることのそのままが報謝である。

自分一人が真実に生きている気で、高い所から見下すことが人間の我慢である。
十八願のころは、南無阿弥陀仏を通して全てを見る低い合掌の心である。自分の中にこそ一切の悪の相を見とどける世界である。

宗教は宗教によつてのみ否定される。
十八願の宗教は、無宗教の宗教である。
美しい象牙の塔を、傲慢界と言ひ、胎宮と呼ばれる。

女人禁制の山からおりて、世の中に隠遁された時、聖人は仏に会われたのである。
真実の仏は、温かい静かな聖者の住む山の頂にはましまさずして、煩惱の風の吹き荒ぶ、苦悩の衆生の広野にこそいたもうたのである。

北越の雪の中にこそ、愚禿を待ちたもう法蔵菩薩がましましたのではなかつたか。

人間の声が、宗教を讃美したり、否定したりする。
一番宗教を擁護し讃美するかに見える大本山、大伽藍の中には仏はましまさないと、宗教を否定するかに見える人間の世界に、仏は今も名告りたもうてあるかも知れない。

十八願の宗教は、法蔵菩薩のみこころである。
法蔵菩薩は、風荒き人間の広野に生きたもうのではあるまいか。
十八願の宗教は、荒野の宗教である。

法蔵菩薩の本願によつて成就された三蔵の浄土は、法界実相の象徴相ではあるまいか。十方衆生ことごとく浄土の大衆でなくてはならない。彼岸には、東西本願寺、木辺派、仏光寺派の差別はなく、真言、浄土、禅によつての差別はない。念仏の衆生は撰取によつて同一である。

ある寺に和尚をつれて講演に行くと、宗派が違うから、和尚だけは語らしてくれないなどのことである。いつか木辺派の孝慈上人を迎えた本派の寺が、大変なお叱りを受けたからとのことである。無理もないことである。在家を借りてそこへ移った。孝慈師と、本派の御連枝とはご兄弟である。宗派の規則が、地上の兄弟の友愛、孝道すら裏切るではないか。まして彼岸の招喚は無視されているではないか。最後というところで十八願のころは失われる。

仏教は思弁哲学ではない。大般若六百巻も、実践をはなれては単なる戯論げろんである。戯論は墮落であつて仏法ではない。

またしても如来の招喚の声が聞こえる。如来まします人間の広野に帰ろうではないか。

十八願のころは一切を超えた広いころである。

無想録二十一 「よきことにて候」

疑い、呪い、誤解、非難、攻撃、等々人生には嫌なことが多い。

心が、攻撃は受け取るまいとし、賞讃のみを引き受けようとし、正解されんことを求めて、誤解されることを嫌う。追えども去らぬ凡情である。

「光明団は、聴聞と言わずに求道と言うから異安心だ。」

「聞いて助けられると聞いていたに、光明団は覚えて助けられると言ったから違う。」

「光明団は一益法門だから退団する。」等々

情ないほどつまらない問題、愚にもつかないほど嫌な誤解、ちつとも私の言つたことを正解していない浅薄な言葉である。けれども、そうしたことを言いふらす人が、社会的位置や勢力を持つている場合、この一人が、その町へ、その村へ、時にはその郡へ、正しいものが流れてゆくことを拒む。私どもは一体どう考えたらいいのか。

「天に声あり、気に入らなければ、誤解、非難、攻撃、疑い、中傷等々を全部とりのけてやろうか。」……………？ ？ ちよつと待つて下さい。

戦^{いくさ}がはじまる。弾丸がシュツシュツとうなつて飛んで来る。たいがいの弾丸は流れてゆく。いちいち当たるものではない。時々当たつてころころと斃れる。人生は戦場のようなものではあるまいか。来る弾丸も来る弾丸も全部が当たつたらたまるものではない。時々一つか二つ当たる。

「おいお前は何か一番怖いか。」

「……………待つて下さい。そう問われると、ちよつと返答に困ります。」

「非難か、攻撃か……………それとも策略か、中傷か。」

「待つて下さい。考えて見ると、それは真に怖いものではない気がします。」

「それなら何か、早く返答しろ。」

「わかりました。恐るべきものは、私の内にいる奴^{やつ}でありました。」

「何じゃと、内にいるもの。」

「そうです。褒められると、当たつてはいなくてもニコニコし、謗られると、当たつていても、くやしがる、外の声一つで、グラグラしたり、あるいは剛情を張つたりして、真実の道を失う、この内の奴こそ、一番恐るべきものでありました。」

「まだあるはずだ。考えてみよ。」

「私の深い魂の声を聞いておれば、こう申します。」

「何と申すか。」

「一番恐るべきは、真実だと答えます。」

「そうだ。そのとおりだ。たとい汝の敵に見えても、それが策略の人であつたら安心せよ。策略はけつして永遠のものではないから。

汝の敵は怒つて来る。安心せよ。怒りは滅亡の道である。永遠の相ではないから。疑われるくらいは何でもないことだ。お山に雲がかかったほどにもないことだ。

相手が、嫉妬から矢を放つた時、安心せよ。その矢はまず相手の心臓を貫いて飛び出すものだ。恐るるに足らない。

誤解は、その責汝になくて、誤解する者の自損である。春の雪だ。何かちよつとすれば消えるであろう。

安心せよ。そのほか、真実以外の何ものも、あまりに恐るるには足らない。」

底なき如来の智慧海に入れ。

人生はこのままでいいのだ。

恐れても恐るべきは、聖者、賢者、智者である。

人間の一切の愚劣なはからいを超えて、正法の前に真に合掌して求道三昧にある人だ。

仏、法、僧の三宝の前に、純粹な信をもつて合掌することほど至難なことがあるか。

寝そべつていてもわかる真理？ がある。

耳だけあればわかる真理？ がある。

頭だけあればつかめる真理？ がある。

合掌せねば受取れない真理がある。

いかに時代の大衆が、挙つてこの唯一の世界を去るがごとく見ゆるとも、人間が、真実を求め、真理を愛して生きている者である以上、この忠実なる「真理への信順」の世界は永遠に滅ばない。しかして人生はこの人によつて代表される。

菩提樹下、正覚の座に結跏趺座した釈尊は、今や正覚を成就せんとして大悪魔軍に宣言していわく

「汝の

第一軍は、楽欲

第二軍は、不快

第三軍は、飢渴

第四軍は、渴愛

第五軍は、懶惰

第六軍は、怖畏

第七軍は、疑い

第八軍は、虚栄と剛情

第九軍は、名利

第十軍は、自らを讃め、他を毀ることなり。

これは汝の軍、汝の武器なり、勇者は勝ちて折伏し、安らけきを得たり。」と。

悪魔の第一軍は楽欲。楽しみを求めて太く短くと、凡情がささやく、この魔軍に滅ぼされたる人、古往今来いくばくなるぞ。

信念の前にこの悪魔軍を克服せよ。

第二軍は不快。不快を歓喜に転ぜよ。不快は生命の消失である。

第三軍は、飢渴。汝はかつて、この魔軍と戦いたることありや。今もそれにおびやかされてはいないか。

「光明団のご主張も結構ですが、妻子が飢えてはなりませんので。このまま葬式屋でおわるのですよ。」

「先生、私には門徒も少ないのです。とてもやってゆけません。どうしましょうか。」
「よろしい。ひき受けます。今日から、この町でだれにでもいい。聞いてくれる人があれば、正法を語りなさい。力いっぱい語りなさい。そして飢えたら、私が『正法に生きて飢えたる者の墓』世界最初の光輝ある墓を樹てましょう。」
その人は決然として起った。

第四軍は、渴愛、狭く言えば享樂的人間愛に溺れることである。広く言えば、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根の享樂に囚われて、道を忘れるのである。本能的享樂がいに現代青年を滅しつつあるか。

第五軍は、懶惰らんだ、なまけである。精進なくして何の生活ぞ。なまけは、人生を無意味におわる第一方法である。

第六軍は、怖畏おそれである。正しい道を行こうとする。この魔軍が現われる。道を変更して、邪道とも知らず、滅びの道とも知らずして迷路に堕ちてゆく。弱者は罪惡の根源である。死をも怖れざるは丈夫の面目。金剛不壞の信、よく第六軍を超克せよ。

第七軍は、疑い。疑惑は、生死流轉の唯一の道、疑惑ある所、眞の生活なし。仏道は「信」の一字につきる。第七軍は仏力によって退散の世界である。

第八軍は、虚榮と剛情。もし汝の上にこれを見得ないならば、他人を凝視せよ。昨日会いし人も今朝語りし人も、この悪魔の捕虜ではないか。ああ。虚榮よ。剛情よ。この人にだけは、安心して対座ができる。永遠の力の人ではないからである。ただ、汝に巢食うこの悪魔はなかなか容易に姿を見せないから、用心肝要。

第九軍は、名利。名利を求めて、正法を求めず、名利ゆえに生活をまげる。大地に名利なく、迷いの空中に名利あり、浮足立ったる平家勢、共に事をはかるに足らず、力とたのむに足らず。名利を与えて列外につれてゆかれる。鋭いかな、悪魔の戦術。

第十軍は、自讃他毀。無くて七癖、自慢自讃のくせのない人があろうか。自らをほめ、他を毀つて、自らを高めようとする。自らを安価にし、卑しくすることこれ以上はない。仏は独尊の世界に自他を尊重し、凡夫は独慢の世界に自讃他毀する。

以上悪魔の大軍は、信なければ、おそれてもおそるべし。南無金剛不壊の大信の前には、巖にあたる波よりも弱い。

他人、この悪魔となつて来るも、けつしておそるに足らない。ただ汝自身の内にありて、汝になりきることをおそるべし。

智慧光によりて、汝の衷うちにこの十軍を見出すべし。見出された時悪魔はすでに克服されたる時である。しかして如来利他の大信なくしては、見出されない。

人生には、疑い、呪い、誤解、非難、等々の嫌なことがたくさんある。だが結論はつきりした。

氷は冷たく、火は熱いまま、好きなことは好き、嫌なことは嫌なままで、そのままがいいのだ。

親鸞聖人不滅の信境の告白、億々の衆生がこれによつて救われた大文章たるあの歎異抄の第二章はいかにして生まれたか。

ご長男善鸞師の秘事法門の惑乱と、日蓮の四個格言の折伏とによつてぐらついた関東の同行の上洛によつて生まれたのだ。

この二つの痛ましい事件がなかったならば、『歎異抄』第二章は生まれなかつたであらう。

しかして聖人はこれをいかに考えられたか、「御消息集」に曰く

「慈信坊に賺すかされて信心みな浮かれあうて在しまし候ふなること、かへすがへすあはれにかなしう覚え候、これも人々を賺し申したるやうに聞え候ふこと、かへすがへすあさましく覚え候、それも日ごろ人々の信の定まらず候ひけること、あらはれときこえ候、かへすがへす不便に候ひけり、慈信坊が申すことによりて、人々の日頃の信のたじろきあうて在しまし候ふも、詮ずる所は人々の信心の眞実ならぬこと、あらはれて候、よきことにて候。」

迷う者に向かつては「かへすがへすあはれにかなしう覚え候」との大慈悲はある。だが慈悲あればこそ「信心の眞実ならぬこと」を知らしめる契機となつて、正信に歩むことのできたことは「よきことにて候」である。

いかなる矛盾の中にも、無碍の一道を生きるものには、統一が見出せる。

逃ぐれば逃げよ。それもよし。叛けば叛け。それもよし。治乱興亡、有為転変、千々に碎くる小波に、映る冲天の月の光。どこを一体変えるのだ。

地震、雷、火事、親爺、嫌は嫌にちがいない。好きは好きにちがいない。

世界ではある。
賛成、反対、非難、賞讃、誤解、正解、迫害、攻撃……等々、なんとにぎやかな
南無阿弥陀仏に生かされて見れば、「何もかもよきことにて候」。

無想録 二十一 邪見

一世二代かかって子供の世界を壊してしまふ母があり、親の世界を全部だいなしにしている子供がある。兄をして世に出られないようにする弟があり、弟を苦しめぬく兄がある。

そうした場合多くは邪見がもとであり、我慢がもとである。世に邪見我慢ほど恐しいものはない。仏説のごとく、一切の悪は邪見一つの中にあると言ってもいい。

邪見の強い者は、私憤や、反逆心が強い。怒る時、人は邪見であり、邪見の人は怒りやすい。

だから邪見の人は、他人に怖れられる。聖賢を畏れるおそれなくて、虎狼を恐れる怖れでおそれられる。

なぜならば、たとい正しい心から忠告しても、その非が的に当たっていればいるだけ、怒って毒舌や権力や暴力で必ず仕返しをするからである。

邪見の人は必ず自分のほんとの相を忘れている。

自分につごうの悪い他人の欠点や不注意や過失はこれを厳しく責めて許さないが、自分のそうした悪に対しては、どんなことでも当然だと理屈をつけて言いわけして許してかかる。

こうした邪見な人は、弱い立場を持つ人たちが、その前でだけ、猫をかぶってへつらつて、ぺこぺこ頭を下げたり、その甘心を買うことにつとめる。だが裏では必ずこの人の悪口を言い、呪いの眼を向ける。もし強い者であつたら、逃げてゆく。

我慢の強い人ほど、自分の勝手を正しいと信ずる。勝手な議論や言い分を通してやらないと、その現場が恐ろしいから、たいがいの人を避けて通す。彼は糞よけされているとは知らないで、ますます自分が勝れた者であるかのごとく信じて、いよいよ我慢になってゆく。

滑稽よりもむしろ悲惨である。我慢な者のひとりよがり、だれ一人として彼の真の友にはなれない。彼の死後残るものは悪罵だけである。

かかる人は、何よりも自分一人の享楽や幸福を求めることが強い。彼のよい人とは、彼に快樂を与えてくれる人のことであり、彼の悪人とは、彼の欲望の邪魔する人である。彼にとっては人生とはただ本能的、感覚的欲望の満足である。

我慢強き人は、致命的な傷を与えるような言葉を平気でまき散らす。彼は、家庭や社会の暗の中心点であり、悪魔である。

昔、中国で家移りをする時、女房を忘れて行った人があった。

孔子様(?)はそれを聞いて「それはまだ何でもないことだ。桀紂はその身を忘れた」と仰せられた。夏の桀王や、殷の紂王は、自分一人の栄華のために重い税や、压制な刑罰などで言語に絶する悪政をしき、民に塗炭の苦しみをなめさせつつ、自分一人の幸福を求めた。彼は自己自身を忘れたのである。

自己を忘れた者は自己を滅ぼす。自己のみならず、家を他人を国家社会を滅ぼす。

「醜婦の百態は悉く醜」である。

彼には金を持たせても、地位を持たせても、学問を持たせても、子供を持たせても、貧乏させても、無学でおらせても、それらが皆彼を生かさないうで、鬼の金棒となる。がまんが先になっている以上は、百態悉く悪である。

この我慢がそのまま、仏教をもてあそびはじめると、恐るべき傲慢になりおわる。恐るべし恐るべし。

我慢なもののはけつして懺悔しない。

世には、安心のできる人物と、安心のできない人物がある。安心のできない人物にも、いろいろ種類があるが、我慢の人の安心できないことは、動物園の獅子と同じである。

高慢なるものは、けつして船底の火夫たろうとしない。彼はいつの場合でも、権力者としての地位を絶対に重んじ、悪質の英雄主義者となつて、必ずその身辺の弱者を犠牲にする。我慢邪見はけつして、下座を行じて人類に仕えようとはしない。

人生には呪いによらねば実現しない思想があり、合掌しなければ開かない法蔵がある。だが、邪見に鞭をあてて実現できる思想は、人類の怨敵であつても、人の世の光ではない。合掌の心によつてだけ人は真に一つになることができる。皆がとけて一つになり得るのは、彼岸から等流する信の世界においてであり、痛ましい闘争をつづけているのは邪見なる現実においてである。

人間世界では形よりも心が問題である。人を殺したということよりも、なにゆえに、どうして殺したかが問題である。そうして邪見が一番悪い心の相である。だから仏は、邪見の人は焦熱地獄に焼かれると説かれた。さらにそれが、一切の聖者を犯そうとするに至つては、尊き文化の華、道の人を滅ぼそうとするのであるから大焦熱地獄であり、さらに肉親の親や、仏をも滅ぼそうとする謗法五逆の邪見なる者は、無間地獄に墮在するものであると説かれた。

年をとった老人がある。結婚の日に持ち出される美は少しもないのに、これはまたなんとという崇高な美であろう。お念仏が口からもれ、その手が合掌している。久遠の本仏の聖容がチラチラとほの見える。しかもその人の口から「邪見な奴でございませう。」とささやかれていた。

内に観れば観るだけ邪見である。邪見を邪見と知った日に、そこに全く思いがけないみ声が聞こえる。その声が聞こえはじめると、安らかな心になる。安心は邪見のなかにはない。如来の光明の中にのみ安らかさがある。

如来の光明は、衆生の上には、信心の智慧となる。よく邪見を克服するものはただこの智慧光のみである。如来の智慧光はそのまま大慈悲である。このお光のみ、我慢を転じて大信懺悔に導くものである。

邪見我慢は醜い。しかし内に省みる時、だれか邪見我慢なしと言えよう。だが人間のいかなる醜い邪悪をすらこれを生かすのは如来である。如来の大慈悲の前に合掌してこの邪見我慢が懺悔の内容となる時、これあるがゆえに生まれる何ものかがあるう。「邪見憍慢悪衆生、信樂を受持すること甚だ以て難し」の聖訓を頂くべきである。

無想録 二十三 余善をそしるなかれ

小郡駅で汽車を待つ間に、子供を抱いて外に何か用事のある方が、赤ちゃんの処置に困っている。釜瀬君がお守りしましょうとて、お抱きした。女の方は走って用事に行き、帰られてたいへんお礼を言っておられた。

汽車の中で、家内が林檎をむいで、子供にやっている時、今汽車から降りようとする人の子供がじつとこちらをむいてほしそうにしている。半分をその子供に差し上げると、子供はすぐさま口にもっていった。その親は二度三度厚い礼を言っ出て行かれた。

「どうぞどこにおかけ下さい。」とて座をすすめられる。その汽車にいる間、明るい気がする。

瀧鶴台の妻が、赤いまりと白いまりを夫に見られて、恥じらいつつ、よい心のおきた時は赤いまりに、悪い心のおきた時は白いまりにまきつけていると告げた話は、小学校の修身書にあった。たったあれだけのことかと思ったら間違いだ。瀧鶴台先生は、山口県右田藩(右田支部のある村)の儒者である。この先生の裏に一生内助の尊いものが光りつづけていたそうだ。右田村の生家の跡には大々的な記念塔ができるとのことである。

小さい善、積尊は時に盲人の世話やら、病人の看護までされた。大善は小善となつて現われる。

日常の生活行動に小善の伺われない人には、けつして大事はまかされない。小善がなければ小悪がある。小悪もやがて、千里の堤をこわす蟻の穴となる。大悪となる。

何日宿つても、箒一つ持たない女は、やがて身の置き所がなくなる。

宿屋の便所に行つてみる。壁に一ぱい落書きがしてある。書に対する教養がないからだ。人が見ていないからこの小悪を平気でする人が、大きな舞台で跳りはじめると、きつとその肩書を傷つける。

小善を認めてそれに絶対の意味を打込んで下さるところに大聖の信境があつた。

世尊に対する純陀の微少なる供養が、未来世の成仏に働いた。

子供の小善を見て喜ぶ親の大歓喜は、子供の大悪を見て泣く親の態度よりも重い結果をまねく。

米国の父ワシントンの父親は、大事な庭樹すべてを切られたよりも、切ったことを正直に白状したその子の正直であったことの方を喜んだ。

信じきる学校の先生から褒められた一言は、一生涯脳裏を去らない。そしてそこに認められた美点長所が一生かけて伸びてゆく。

悪をにくんで裁くだけで、善を少しも喜んでくれない人の前では、人の心の尊い芽生えは霜枯れてしまう。

霜雪は生長をひきとめて、内に堅くし、春の温かさは、芽を葉を伸ばしきってゆく。

疑われることの苦しさに、人を疑うまいと決心し、裁かれ、非難され、誤解され、怒罵されてみて、人を裁くまい、非難すまい、誤解悪罵してはならないと自らを誡める。

唇と声帯とが動いてもものを言う。いかにも小さいことである。

言った方はその場で忘れても、聞いた方は一生涯忘れられない場合がある。

東伯支部の松山ひめのさんは、小鴨村のために働いている。今ごろはゴム裏草履の副業をおこすために言語に絶する辛苦をおしきっている。日本海から寒い風の吹いているある日、赤崎駅？についている草履の材料をとりに行つたが、駅の保管料やら、代金やらがなかったために受け取られない。それにあてにしていた人は留守である。駅長さんにご相談しようとすればこれもまたお留守である。今とらねば組合員には65申しわけがない。困りはてている時、ぽんと二十円なげ出してこれで受け取つて帰りなさいと告げて急いで汽車に乗ろうとする方がある。名前さえ知らない。走りよつてお問いとすると、市勢小学校の竹本先生であった。

自分自身の窮迫をもともせず働き通している松山さんのすべてを知る私は、松山さんの、その時の心境を思うて涙した。竹本先生とやらよくしてやつてくださいました。松山を奮起させるには、これだけで充分です。

親鸞聖人は『唯信鈔文意』に

「恒沙の善根を修せしめしによりて今大願業力にまうあふことを得たり。他力の三信心を得たらん人はゆめゆめ余の善をそしり、余の仏聖をいやしうすることなかれとなり。」

と誡められた。

「悪業をば恐れながらすなはち起し、善根をばあらませども得ること能はざる凡夫なり。……ただ仰ぎて仏智を信受するに如かず。」

との他力の信境は、けつして善を無視するものでも軽んずるものでもない。悪業をば恐れながら……即ちおこし……善根はあらしめたいと求めつつ得ること能わぬ凡夫である。善を尊び悪をおそればこそ至り得るのが他力の大信海である。

善を行じつつ、善を忘れ、悪を悪として認識して、善悪を超える所に他力の大信心海はある。

善の糸をたぐらんとして、悪の重きを知り、悪自体を転じて大善たらしめ給う如来の本願を仰ぐの心である。

行ずる善を代償として、幸福を神仏に求めんとする時、その功利的な心に反省と批判の智慧は働かねばならないが、しかしそれはけっして、善それ自身を滅ぼさんとするのではない。

念仏が大善だからとて、これを固定化し、偏執して、他の善をけなしたり、軽んじたりする生き方には、おそらく念仏もまた無生命な概念的なものになるであろう。

真如界から流れ出る大善大行はやがて、人間の身口意三業の上にさまざまな善となつて表われるであろう。

小善なきを悲しむあまり、如来を疑うのは許すべからざるはからいであるが、如来ましますとて小善を軽んずることも人間生活のつまづきである。

中国の聖者は「戦々兢々きょうきょうとして薄氷をふむがごとし」と言われた。われらもまた、善は小なりとも行ない、悪は小なりとも怖れて、生きさせていただけようと切念する。

東京、大阪、神戸と大都会に至るにしたがつて、日に月に迷信が盛んになってきたようである。ここにいちいち例をひく暇がないが、その状態を知ってくると、滑稽というよりはむしろ悲惨である。生神様が出たり、生仏いきぼとけが出現したり、病氣平癒、商売繁昌、等々のために、愚にもつかない迷信が街の裏に表にはびこつてゆく。そしてそれは仏教の衰えてゆくのに反比例しているようである。この傾向は、広島のような仏教国にすらも著しく現われてきている。田舎もちろんご多分にもれない。世はまさに迷信狂時代である。

宗教は衰えたと言われる時に、それとは真反対に、何ゆえに迷信狂時代を出現してゆくのであろうか。それはわれらに与えられた大問題でなければならぬ。私はそれについて次の諸点を考えることができると思う。

- 一。生活難
 - 二。宗教的教養の貧弱。
 - 三。国民文化の低いこと。
- その他にも多くの条件があると思うが、この三点がその主たるそのだと思ふ。

その第一の生活難のために、高遠な哲理や、崇高な理想や、人格的道義的な仏教などに頭を使うよりは、なんらの準備も教養も用いないで、ただ与えられた行の形式によつて、現世を祈る神々に走ることが、どれだけ必要だか知れないとの考えからである。「神は幸福を与える」との漠然たる信仰が民衆を駆つて、至る所に神や仏のご繁昌を来たすのである。この生活難と迷信との関係はすでに論じつくされた問題だからこれくらいにしておく。

第二の宗教的教養の貧弱は、国家的社会的大問題ではあるまいか。

国民の道義の水準はその奉ずる宗教の高さに比例すると言つてもいいと思う。

朝鮮民族を思う時、あの朝鮮の内部にはびこつている普天教その他の、それこそ、無智蒙昧な、お話にならぬ迷信邪教を想起せざるを得ない。真理性の少しもない、迷信に輪をかけたような神を今でも信じさせられている。そして彼らは独立する能力のない国民であつた。

東京帝大仏教青年会誌「仏教文化」五月号の冠頭に、長井真琴氏の「仏教文化運動の樹立」というのが載せてある。氏が欧米に旅行しての感想を次のごとく書いてある。

「その際痛切に感じた事は、かの紐育ニューヨークのリバーサイドチャーチなどへ行つて見ても、三十余年も費して完成したその広大な殿堂が、常の日曜のサービスでも立錫の余地もなくなるほど民衆が集まつてきて、祈祷し、讚美歌を歌い、敬虔なクリスチャンとしての行事を実行している姿を見て、米国の民衆は宗教的教養において充分明日の文化

を指導し得ると感じた。英国においても各教会は日曜ごとに会場一杯の会衆を迎えてサービスを行っている。従来の旅行者が、英米においては宗教はもはや民衆の心から捨て去られたと物語っているのを聞かされたけれども、この教育の日曜ごとに行われるサービスを見て、だれがその言葉を信ずることができよう。」

東京市などでは、仏教の講演などがあつても、普通、四五十人も集まれば盛会の方であるのと思ひ合わせて感慨なきを得ない。

私どもは映画を観てその感を深くすることであるが、西洋映画では、きわめて敬虔な場面に神の出ることはあつても、茶化するための時に宗教は出ない。ところが、日本の映画を見てみると、南無阿弥陀仏とか南無妙法蓮華経とかが出る時には、たいがい滑稽か茶化すためか、ユーモアのために爆笑嘲笑を買う場面のみ出されてくる。私はいつも嘆かわしいことだと思つている。

印度についての感想がつぎのごとく書いてある。

「アジャンタの洞窟の偉大なる遺蹟、祇園精舎や鹿野苑や仏陀伽耶の遺蹟、その他、阿育王の事蹟を物語る数々の美術品等を訪れて、私は在りし日の仏教時代を偲び、低徊去るに忍びなかつたのであるが、一步外に出て印度の民衆に接すると、自分の抱いていた仏教印度の幻は、一撃の下に打毀かれてしまふ。印度教寺院の山羊の犠牲とか、印度人の貪欲さ加減とか、その不潔極まる生活などは、かつて仏教が教えた五戒、八正道、六波羅蜜等の尊い教は全く忘れられて、現世主義で、貪欲で、嘘を言い、金銭を貪り、人の物を失敬するなどということは何とも思つていない。汽車の中でも洗面所などに何一つ備えてないし、客車なども、日本のごとく箱の中を自由に通行できるようにはしないで、六人なら六人だけしか入れないように仕切つてあり、あらゆる施設は偷盗を防ぐためにできているというありさまであり、その惨酷な犠牲なども、山羊一匹を供えれば、その二倍の利益が得られるという觀念の下に行われている。真に低級な宗教を持つ国民は、これほどまでに文化を低くするものかと頷かれた。」と。

時々、「仏教のおこつた印度を見よ。仏教のために国が滅んだではないか。」と問ひかける青年がある。

しかし印度はけつして仏教によつて滅んだのではなくて、仏教が勢を失うにしたがつて、低劣なる印度教、回教などが取つて変わったのである。そしてその現状はあの通りなのである。

日本の現状をどう見ても、仏教が栄えつつありとは思えない、そしてそれに取つて変わつてゐるものは、いったい何であるのか。

その罪の大半は、過去の仏教者たちが負わなければならぬ。寺院の説教や、その宗教的形式において、深いものを持ちながら、正しい深い教育によつて民衆を高い高めないで、いつまでも「民はよらしむべし、知らしむべからず」といつたふうの低級

な説教でゴマ化しておいたがため、知識階級と青年男女とをして、寺院とは、葬式をする人のいる所、お浄土とは死んだ先のこと、他力とは何もしないこと、寺院には、老人しか集まらない所といったふうな感じを一般に持たせてしまったのである。しかも真の仏教はそれらの真反対である。

それとともに、その大半は明治時代教育の弊害である。だから見よ、最高学府の教育を受けた人たちにして、仏教者であつたら老婆すら信じないような迷信を平気で信じていつつ、仏教については全然知らないくせに、仏教を怒罵し、宗教を冷評しつつ自らは、方角博士、日柄博士のご厄介になつてゐる。

第三、国民文化の低級。

人間は少し非常時めくと、すぐその正体を暴露するものである。かつて大正七八年ごろ、黄金の洪水が日本の岸におしよせた時、いわゆる成金たちは、牛乳の風呂に入つたり、百円札に火をつけて手燭のかわりにしたり、濫費豪遊、醜態愚劣の極致を發揮した。そしてその裏が今日来ると、内面生活の空虚を赤裸々に表して、エロ、グロの刹那主義、享楽主義の全盛となり、迷信狂時代を出現し、御神火イズムにたたられ、素朴的な唯物思想に害せられ、真面目に人生を考えず、苦悩を克服して逆境にうんと力を培い、天然の試練に打勝つて民族の使命を果たそうとはしない。しよせん世界のいずれの国に行こうと、苦しい時なのである。ただよくこの逆境に真の伝統の力を發揮し、新しき理想にむかつて歩みきる者が、やがての世界の指導的位置におかれるのである。順境にも学び、逆境にも学び、驕らず、悲観せず、自暴自棄に陥らず、いよいよ確乎たる信念によつて無我の生活に終始すべきである。

科学すら真に教えられなかつた国民、その精神教育だつて、無内容な熱のない教育ではなかつたのか。知的教育すらもつと徹底していたら、かかる迷信狂時代は来なかつたであろう。ましてもつとその精神教育が画一主義を出で、宗教的色彩を持ち、師範教育そのものの方向を変えていたら、これほどまでに墮落した社会はできなかつたかも知れない。

しかし、日本の宗教的文化が低かろうと高かろうと、日本はわれわれのものである以上、悲観していることは許されない。コツコツと仏教の示す理想を掲げて歩まなくてはならない。人は一度に二つの仕事はできない。恵まれた短い生命を打込んで時代と時代とをつなぐ現在に一つの小さい文化の火として燃えてゆけばいい。私の一生はただ、仏教について、ほんの一言を知るだけで終るかも知れない。それでも満足である。

仏教では正しく教を説く人を国師といい、正しく仏教を生活する人を国用といい、国師、国用を兼ね備えた人を国宝というそうである。考え方によつては、三つとも揃つていようし、考え方によつては、国師すらないとも言えよう。尊い国師が現われ

てくるためには、国民の歩みがそれを求めねばならないし、多くの国用が国土を莊嚴するためには、りっぱな国師が必要である。

私は長い間沈滞していた仏教界に、幾多の真面目な国師の現われかけているのを拝んで、感謝するものである。

われらは純真に国師の導きによって、文化創造の礎石となりたいものである。

無想録二十五 強者

強者は勝ち弱者は滅ぶ。ゆえに常に勝ちつづける人になろうと人はする。体が弱くなり、病におかされるとすぐ死の暗黒が待っている。体も心も強くならなければならぬ。そうして勝利者であらねばならない。

どんな人が真に強いのであり、いかなる人が真に勝ちつづけた人なのであろうか。沈黙して静かに考えないではいられない。われらは真の意味では必ず勝たねばならない。

私の弟妹たちよ。どうか道のために強く生ききつてくれ。信ずる道に進む時には、いかなる力が碍げようと必ず歩みきる強者になってくれ。

大言壮語している人でありながら、「気の毒なほど弱い人だなあ」と思うことがあり、黙して笑っているのに「強い男だなあ」と感嘆することがある。

進むばかりで、退くことや、眼をつぶって深く考えることを忘れると、強くはなれない。猪の真似をしていると、息がきれて、進んだはずで一つ所をくるくるまわつていたり、斃れてしまつたりする。

静かな余裕を持つことを忘れてはいけない。

強いようでも我をおし通したり、怒りや反逆や嫉妬の心でしたことには、真の強味はない。念仏の腹をつくつて頂くこと、金剛不壊の大乗腹が何よりも必要である。

象も強い。獅子も強い。全身全霊、象のように歩みたい。獅子のように進みたい。仏さまの歩みを如象歩といい、仏さまの心の境地を、獅子奮迅三昧といい、仏さまのご説法を獅子吼という。それに通う何ものかを抱いて生きる。

人生に対する根本の信念が確立していないで、時の流れの雑音ぼやしかたによつて動いていたら、真の生活は生まれぬ。ジャーナリズムはその時代の囃方ぼやしかたである。

私の弟妹よ。聞いて求めねば何もわからない。真理に根ざさないでは、強い生活はない。聞け、求めよ、読めよ！ 考えよ！ 大理想は、ただ教養によつて生まれる。

教養のない勇氣は、猛獣のような勇氣である。大勇は尊ぶべく、小勇は戒むべきである。

しかして強者は必ず勇者である。

己に勝つ者は勇者中の勇者である。

弟よ妹よ、そし兄たる私が、正しいことでないことで、あるいは私の勝手や、利己心から、君たちの歩む道を妨げようとした時には、たとい、私がどんなに哀願しようと、怒ろうと、そのために道をあやまつてはならない。たとい私が餓死するのをよそに見ながらでも、お国のために、人類のためになることなら、知らぬ顔で歩みきつてくれ。

煩惱即菩提とは大乘仏教の提示する第一義諦である。

煩惱は大地の内奥から湧き出でる力であり、菩提は、崇高^{たか}き彼岸から流れて来る平等の生命である。

煩惱は人間を造る力であり、菩提は仏を造る道である。

煩惱と菩提の一体なるところに菩薩が生まれる。そこに真の人格の力が生まれる。

煩惱あるがゆえに人間凡夫の心があり、菩提の智慧あるがゆえに、高き仏の心を知る。

平等にかたよつて、煩惱の声を無視すれば縁覚であり、煩惱の声のみに動けば凡夫である。

声聞縁覚は人生を逃避し、凡夫は人生に執着する。ともに真の力を持つてはいない。

気の毒な女の方である。母一人娘一人の家庭でありながら、母は娘が三十にもなるのに結婚させない。養子もとらないし、嫁にもやらない。芝居や活動にも一度も出さないし、ただ毎日を事務所に通つて月給をとつて、青春は去ろうとする。

母の心もわかるし、娘の心もわかる。

理屈も道理もない凡心のみの母の心、お題目さえ称えていたら、何かしらいつかは奇蹟がわいてくると考えて、娘にも強いている母、結婚させて娘を男にとられるよりはいつそ死んだ方がましだと思ふ心、はつきりわかる。

その母ゆえに、やさしい乙女心が傷つき傷つけられつつ、恩愛の繩にくるくるまきつけられて一足も歩けない娘の、反感、呪い、不安、憂鬱、それでも一口も母にはそむけない弱さ。

絶ち難き恩愛、その暗の心、大地の心だけで生きてゆけば、脚下に横たわるものは、悪道の暗であり、地獄の火炎である。

天上よりの招喚をちらと聞いたがいい。皆が笑つて生きられる世界があるものを。

「救いというのは貴女の考えているのとは違い、その母上と一緒にあることよりも、そつと不幸がわいてきても仏さまのお慈悲がないからではない。『神も仏もないもの

か』その心こそおそるべきであります。私は、私の腹痛を治してもくれないし、黄金を天から降らしてもくれない。ましてやお婿さんを箱から出してもくれない。今日まで貴女の生き方は、ただ母の上を中心に中心があつて、貴女の上になかった。貴女の生活を貴女の上に奪還しなさい。母上は気の毒な方です。貴女がはつきり仏の心に帰った時、悪人をこそ救う仏の心が頂け、一切を背負つて立ち上がる力が恵まれます。日蓮上人は、よし龍口で斬られたとしても、けつして斬られてはいないのです。……一時間、二時間……話しつづける。

「私は全く間違っていました。」そうです。強くなるには、自分の間違いを発見することです。

「み仏の強いお力が、はつきりわかりました。母がいけないのは私がいけなかったのです。私の心の内に、その金剛の信力をよりはつきり頂いて母とともに救われます。」あなたの顔は輝きにみち、強い足どりで帰つてゆかれる。

仏教には「触光柔軟」という言葉がある。智慧光に触れると柔軟になることである。時に硬直なまがたいのが強く見えるが真の強さではない。

ニッコと微笑している高僧、それに寸分の間があるだろうか。真の力は柔軟の相の中にある。

人を罵つてみたつて、残るものは淋しさだけであろう。

弱者は人の短所や過去を罵つて、自分を高めようとする。

そうした百万言は、五分間の勉強よりも無価値である。

われおよびわが同胞をしてかかる弱さから愚かさから出でしめよ。

強くなるのにはただ鍛えること養うことである。

西園寺公は八十歳に余つてなお、陛下の御下問に答え、一國政治の大御所である。平素常に洋書を読まれるという。八十歳の老人になつて英語を教えたのでは、Bを教える時にはAを忘れ、Cを知ればBがなくなる。若い時から鍛えたことだけ八十歳になつても、すたらない。田舎の老婆などは、七十歳にして老衰、老耄ろうもうして三つ子のようになる。八十歳にして一國の大財布を握っている高橋大蔵大臣を思う時、使わない頭は早く衰える。

二十歳の若年者、三十の老人、四十の老朽、五十のご隠居、薄志弱行、事なかれ主義、無努力、怠惰、無理想、等々の墮落者の末路である。

「先生ご苦勞ですね、薪割で。」

「いや別にお礼には及びません。お飯をおいしゅういただきましたためです。」

汗が流れようが暑かろうが、曇ろうが、晴れようが、満ち満ちた健康体には苦痛ではない。

働いた時だけ食事がおいしい。

人間、苦しみつつ勝ちつつづけてゆく日に、み法の食事も甘味しくいただけ。
体と心の健康！ 微笑の日が毎日続く。勝ってよし、負けてよし。生きることこそ
無上の喜び。

勝てと言った。だが、真に勝つとは、勝ち負けを超えることだ。

勝敗、盛衰、喜怒、哀楽、等々の一切を超えた彼岸から、またしても招びつつづけて
下さる声聞こえる。

ただこの必然の声に生きる。

感傷主義者の輪廻

白隠禪師と言えば、ただに禅門のみならず、仏教に志すものだれでも知っているほどのお大徳であるが、初めからお大徳であったのではない。禅師は、東海道原駅の松蔭寺という、いたって小さいいわゆる孫末寺で、雨が降れば屋内でも傘をささねば歩かれないという破れ寺、この寺に一切の利欲貪念を捨離して、伝来の向上の一着手を全提し、いわゆる「江湖の龍象を奔走せしめ、天下の王侯を聳動す」と言われるまで、その化風は一世を動かした。そこで松蔭寺をめぐる数里内は、廃寺も辻堂も参禅者の住居と化し、空前の大繁盛を禅門の上に招来せしめた。これほどの白隠も初めからそうではなかった。

白隠禪師が正受老人に参禅した時、何と答えても言うても、

「この穴ぐら仏法」

と怒鳴られる。一言開けば「穴ぐら仏法」、ついには室に入ればやられ、敷居をまたがぬさきから、この「穴ぐら仏法」を食わされる。そこでさすがの白隠も困りはて、幾度も逃げて下山しようとしたか知れない。けれども、その心と戦いつつなおも修行をつづけていたが、ついには老人から高い縁下にたたき落とされた。ところが、ある時、一人の老婆の家の前に、ぼんやり立った。すると老婆が、

「何もやるものはないから、他へゆけ！」

と冷たく怒鳴った。道を求めることに心をくだいている白隠は、老婆のこの慳貪な声75も耳に入らないで、なおもぼんやりしていると、「この間抜け坊主、何をぼんやりしているのだ！」と突如、竹箒でたたいた。その刹那、白隠は豁然として大悟した。そこで白隠はおおいに喜び、庵に帰り、まだ門を入らぬ先に、正受老人は、これを見て

「そこだ！そこだ！」
と印可を与えた。

この話について考えることができるのは、①正受老人の冷たき大慈悲である。②白隠の真実求道の大精神である。そこにもし、甘ったるい智慧の光らない、人間的な言葉や態度が出たならば、師弟ともに助からない。

「私は人生がさびしいのです。たった一人ぼっちなんですわ。」

「私はそのあなたに同情します。さびしいでしょう。ともに慰め合って……」

こんな調子のセンチャン同志のその行末はきまっています。

不断煩惱得涅槃と、不断の世界に生死一如を信証する仏教は、また横超断四流と「断」の一字に疑情迷心を絶つ、不断と断、ともに生きてそこに決定がある。道がある。

他人を愚視するの誤

聖徳太子の憲法に曰く

「いじろのこかり 忿 を絶ち、おそてのいかり 瞋 を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り……我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是みし非みするのことわり、詎能く定むべき。相共に賢く愚かなること、みみがね 銀の端なきが如し。」

大賢は愚に似たり。われ一人賢くて、他は悉く愚者、愚いよいよ深くしていよいよ賢者智者をもつて任じ、言を荒くし、威をたくましくして諍論する。向かつては畏れ、追従する人はあり、糞よけにする人はあつても、面と向かつて誠むるものがない。いよいよ増長して、上る所を知らず。学ぶもおのれに帰つてわれを培うことなく、一言を誇り、寸智を弄ぶ。その行末や知るべきである。

「底ひなき淵ふちやはさはぐ山川の浅き瀬にこそあだ波は立て」(古歌)

大衆を愚かなりと見、大衆は浅薄なりと考へての運動は必ず失敗す。

古来仏教の大徳は、上れば上るだけ、一切を拝み、一切を尊重し、深い智慧に帰れば帰るだけ、下座におり愚者に帰り、一老婆すらその大悲の胸に抱いた。

「我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず。共にこれ凡夫のみ。」

善悪、智愚、すべてしかりである。善と高上りするは、悪の極み、賢と誇るは愚の極み、一片の我慢、ただいたずらに躍れるのみ。われこれをおそる。

新しがりの軽薄

何でも新しいのが優れており、西洋から来たのがよく、西洋人の名さえ列べたら賢いと考へて、日本は過去つらい毒を飲まねばならなかつた。

「仏教なんて、つまるものじゃない。われら若人はあんなものに用事があるか。」
76
幾度か青年新人たちの口から聞かされる。失礼ながら、仏教についてどれだけ研究したことがあるのだろう。仏教と言えば古い、自省と言えば古い、倫理は古い、何は古い、彼は古い、古いものは一切つまらない。新しいものは何でもいい。この種の人、何でも新しがる者は軽薄であり、ただいたずらに横に横にと、幅が広くて深みがない。一芸に秀で、一道に達する者に、かくのごとき軽薄者流は一人もない。

陋習るうしゅうの墨守

その反対に何でも古いのがよい。昔ながらの悪い因襲に囚われて、生命のない殻を抱いて守る。この種の人に発展はない。「日ニ進ムニ在リ、日ニ新ニスルニアリ」樹が太らなくなつた時は枯れた時、人が進まなくなつた時は退く時である。虚仮を抱いて虚仮と知らず、ただいたずらに旧来の陋習を守り、先人を通して改めずば、ついに時代よりおき去りに会うとともに、その人自身もまた、枯死せねばならぬ。人を苦しめ自ら悩み、白眼世をすねて、文化の流れを妨げる。七十歳の老僧、本堂において講演を許さず、昔ながらの説教を聞く者は老人のみ。この種の人三十四の若老人にもあり。生存の意義がどこにあるう。

岡本法師、六十二才の高齢をもつて、本団聖講習会に参加せらる。「我等の青年団長」の名はふさわしいかな。

独占意欲

独占意欲はだれにでもある。これが多いだけ人物を小さくし、世間を狭くする。門徒の独占、弟子の独占、知人の独占、地位、名誉、縄張り、女、食物、座席、学問、財産等々、それが増し、それが深くなればなるだけ、我執が増し、愛情がまし、怒りが増す。

積尊は、一切の所有を否定して無一物を体得し、その無一物中に無尽蔵を獲て仏陀となられた。

自分の所に集まる人を、他の人にとられまいとして、感情をもつて、親切をもつて、物をもつて、言葉をもつてひきとめて独占しようとするがごとき宗教人、その劣悪な心情をこそ、仏智によつて清算すべきである。でなければ、仏教の真髓を会得することもできないし、大をなすこともできない。

誤れる実践主義

「理論もいい。だが、われらはとにかく実践するのだ。」

かかる人には、ほんとうの意味の実践は不可能である。かかる意味の実践は、万人悉くせぬものはない。われらにかかる半可通の人たちの実践に真理性なく、確実性なく、永續性なく、幾多の醜き残骸の横たわっているのを見る。

時に行うも道であり、時に行わぬも道である。行くばかりが道ではなく、時に退くも道である。馬車馬式実践や、無茶苦茶流の実践は世を毒すること甚大。われらは行う前に、真理の使徒でなければならぬ。自己清算に忠実であり、己の本然の相に帰らなくてはならない。理想郷の出現を説きつつ、悪徳記者となつて、ゆすつて食うがごときは、悲惨の極みである。

求道を忘れたる仏教徒の実践化もまたしかりである。

実践なき大言壮語

世に実践なき人の大言壮語ほど困つたものはない。手は何をなせるか、足はどこを歩めるか、わが全身にはいかなる血めぐれるか。わが口にはいかなる言葉を出しつつありや。そこになんらの反省自知なく、しかも自らは大言壮語に時を空費す。この種の人の迎えられるところなく、仕事のできるためしなし。いずれの所も厄介扱いが関の山である。大言壮語が、その人の真価でなくて、そのなせるところが、その人の真価である。その信ずるところ、その心のありのままが相形すがたかたちの上に出るのであるがゆえに、遊んで大言壮語し、身を守ることすら知らず、遊蕩三昧、働くことを知らぬ者は、村の厄介者であり、よく考え、よく学び、村民と一致共同、よく着々と実行する者は、村の宝である。世の宝である。

柔らかならぬ強者

言動にゆとりがなく、柔和なところが見えず、硬直なまがたくて、いたずらに反抗的であり、我慢を通すことのみを知つて、悪を知つて謝らず、非とさとつて悔いず、人を責めることに急にして、われを許すこと寛ゆめやかに、常に大道を歩まず、人に和せず、悪質の皮肉のみがその言動に出で、林のごとき静けさなく、腕力、智力、弁才を誇つていかな

る時にも優越の立場を去らぬ。偉人は尊ぶべく、奇人は笑うべし。偉人は柔かなること時に凡人のごとし。織田信長は何がゆえに滅びしか。

柔道とは体と心の凝りをぬいて、真の力を自然に活用する人を作る道である。仏法もまた柔道である。柔軟道である。

生ききる気概なき弱者

柔らかさのない強者がいけないように、気概のない弱者もまた、浮かぶ瀬がない。一生、妻に虐げられた男、一生一度も、心のままに生きたことのない人間、常に人の鼻息を伺い、その顔色を見る、いわゆる社交家は、弱き七面鳥の種族、この人に仕事のできたためしなく、その一日一日は生活ではなくて生存である。真価は土の底に埋もれ、個性は灰色に塗りつぶされる。教育学の命法よりも、村長の顔色を問題とする校長に真の教育なし。門徒の長き因襲と戦って、餓死すら厭わぬ僧侶によつてのみ、正法は高く掲げられる。

何等の使命なき生涯

なんらの使命を持たない人があるとすれば、それほど無意義な生存はない。希望は人を明るくし、使命は人を強くする。歓びのない生活は暗い。しかし使命を持たざる人の喜びは利己的である。もしなんらの使命を持たないならば、その人の生活は、必ずその中心点が人生享樂より一步も出ない。もし享樂が得られなくなり、逆境が見舞えば、三原山へと走る。死んでも死にきれぬ願いを持つ時、最後の一呼吸、最後の血の一滴までが使命のために費される。

ああ。なんらの使命観なき若人の群！何をか言わんやだ。墮落これにすぎたのではない。

「大乘菩薩道を社会のすべてに承認せしめよ！」

われらの使命は簡単である。

以上十則、われ自らを誠むるの言葉である。あえて同胞におくる。